
ブレイクブレイド 黒の章 (改)

mohi-san

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイクブレイド 黒の章（改）

【Nコード】

N5736Q

【作者名】

mohi-san

【あらすじ】

ブレイクブレイドとナデシコのクロスです。

9 / 29

現在、小説関連のデータ紛失により、著しくモチベーションが低下中。

コツコツと書き留めて置いた下書き、プロットなどもなくなってしまったので更新を断念せざる終えない状況です。

更新再開の目処が立ち次第活報にでも上げたいと思います。

用語説明 ブレイクブレイド編 6 / 26 更新（前書き）

注意

ブレブレ側の用語説明です。

ですがこの小説内だけでの設定とお受け取りください。原作と違う点、判明していないのに表記されているものについては、作者独自の見解に基づいたものであり、あくまでこの話の中だけの設定だと言っことをご了承ください。

暇を見て少しずつ更新していきます。

■クルゾン大陸

今作の舞台。三日月を寝かせた半島のような形をした大陸。特徴としては化石燃料——オイルが採れない。

■魔力

”石英”に命令できる力。これによって石英を自在に操る。ただ魔法ものなどでよく使われる触媒としてのものではなく、この世界における魔力とは石英に”意思<命令>を伝える”ためだけのものである。

むしろ伝えるための手段を<魔力>と便宜的に言っているに等しい。故に魔力の強弱とは——個人が一度にどれだけ多くの石英に意思を伝えることが出来るか、そしてイメージをより鮮明に伝えられるか、という事になる。

もちろん、数が多く、イメージを鮮明に伝えられるほうが、魔力が強いという事になる。

■石英

人が魔力を介して自在に操る事が出来る不思議な鉱石。熱や油に弱い。現実世界の石英とは異なる。

石英にはいくつかの種類があり、それぞれ特徴がある。以下記述の通り。

無反応系石英——剛性に優れている。ティーカップやテーブル、果てはゴウレムまであらゆる資材として使われている。

伝達系石英——命令を他の石英に伝達するもの。イメージとしては電線を考えてくれればいいのかも。扱うのは電気じゃなくて魔力だけだ。

伝達系石英は油で反応が鈍くなる。

柔軟系石英——主に反応系石英を指す。中でも高純度のものは石英靱帯精製の対象になる。

■石英靱帯

伸縮能力を有する、ひも状のもの。

車のカム、ゴウレムにプレスガンなど、様々な分野で使われている。

■魔動巨兵くゴウレムく

全長一〇メートル（八・五m）程の二足歩行型陸戦兵器。

胴体部に搭乗席を設け、フレームに石英靱帯を纏わせ、高剛性の石英を装甲としてまとった巨大兵器。

動力源と呼べる物はなく、石英靱帯が筋肉のような役割をして動いている。

戦闘時には手にプレスガンや剣などを武装させて戦う。様々な武装バリエーションが存在する。

なおこの全長は長い研究の末に導き出された数時であり、機体バランス、機動力を得る面でこれが最適となっている。各国のゴウレムも多少の誤差はあれど、基本的にこの大きさで統一されている。

■魔動戦士

ゴウレム乗りの通称。

プレスガンが扱えるか、扱えないかで高位と下位に別れる。

■プレスガン

簡単に言えば空気銃。石英靱帯の登場により可能になった圧縮機構により、圧縮した空気の開放圧で弾を飛ばす。

弾は半球状ではなく、長い杭状のものになっている。

バリエーションでロングプレスガンと呼ばれる長距離用のものもある。

扱える人間はプレスガンを扱えるものの中でも更に稀。

用語説明 ブレイクブレイド編 6 / 26 更新（後書き）

あからさまな間違いがあればご報告ください。調べなおした後に修正したいと思います。

用語説明 ナデシコ編 6 / 26 更新（前書き）

ナデシコ側です。ほとんどウィキ頼りなので、詳しく知りたい方はそちらへどうぞ。

全てを記載すると量が膨大になるため、こちらは話の中に出てきた用語だけを記入していきます。

■ エステバリス

ネルガル重工が開発した全長六メートルほどの機動兵器。

アサルトピッドと呼ばれるコックピッドブロック中心に、フレーム換装方式を採用し破格の汎用性を得た。

特徴として操縦方式に操縦者の意思をダイレクトに機体に反映させるIFSを採用して高い追従性を獲得している。

■ ブラックサレナ

全高約6mのアキト用カスタムエステバリスに、全身への追加装甲と高機動ブースターを装着した全高8mのテンカワ・アキト専用機である

重装甲を装備し、脚部自体を巨大なスラスタユニットに変更、両肩の展開式スラスタバインダーを始め、肩部や腰部などに各部姿勢用制御ノズルを多数配置して既存の機動兵器とは比にならないアクロバティックな運動性と高推力を確保した。

なお高機動ユニットと呼ばれる外付けのパーツのいくつかのバリエーションが存在する。

■ IFS

IFSは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした。

■ ボソンジャンプ

一種の瞬間移動のようなもの。ただし「瞬間」ではなく、移動前と後では時間差が生じる。時間と空間の移動でもある。通常生身の人間がジャンプしようとするとは遺跡が思考を翻訳できず失敗するが、火星のナノマシンの影響を受けた人間や遺伝子的な調整を受けた人間なら遺跡への正確なイメージ転送がなされ、ジャンプが可能である。高出力のディストーションフィールド下であれば、生身の人間にも耐えられる。

■ディストーションフィールド

正しくはスペース・タイム・ディストーション・フィールド（時空歪曲場）。相転移エンジンから得られる膨大なエネルギーを用いて自艦の周囲の空間を歪ませ、敵の攻撃を逸らしてしまう一種のバリアである。グラビティブラストやビームなどの光学兵器に対して特に有効であり、ミサイルや銃弾などの実弾兵器、またはレールガン等の質量兵器に対しては相対的に効果が薄い。

序章 1（前書き）

以前まであったのを、無駄な部分を省き、一つに纏めました。
内容はほとんど変わっておりません。

一度読んだ事ある方は、読み返さなきゃ分らないという事もないので、次話からどうぞ。

序章 1

復讐——その果てには何が残るといえるのだろうか。

恨み、憎悪、怒り、全てを燃やし、命すら燃やして成し遂げたその先に何があったのだろうか。

結果は何もなかった。

その先に見るものなどないし、元からそこで終わりなのだ。

復讐は終わった時点で完結される。

故に先に何も無いのは当然の理といえる。

満足感、達成感も、喜びも、嬉しさも……何もない。

感じるのは虚無感。

復讐という満たしていたものが無くなり、心にぽっかりと穴が空いた自分。

残ったのは空っぽな自分。

いつだって彼女は言っていた。

——アキトはユリカの王子様

——アキトはいつだってユリカを守ってくれる

——アキトはいつだってユリカを幸せにしてくれる

——アキトはいつまでもユリカと一緒にだよ

——アキトは……

——アキトは………

今の変わり果てた自分を見ても、そう言ってくれるのだろうか。
いや……きつとない——彼は思った。

彼女は変わらない。彼女が見ているのはいつだって『アキト』だ。
彼自身そうありたかった自分。ラーメン屋を営んでいるはずの自分。

でも今いるのは、満足に笑うことすら出来ない過去の残滓。

手を血に染め、復讐の為に多くを犠牲にし、罪を重ねた重犯罪者としての『テンカワ・アキト』しかない。

きつと今の自分を見たら彼女は……

だから彼は逃げ出した。

仲間から、彼女から、自分から……

全てから目を逸らして逃げ出した。

あとは静かに消えればいい。記憶も傷も痛みも全て時間が解決してくれる。……そう思っ

■

溪谷があつた。

草木は無く、荒れ果てた大地に出来た大きな溪谷。

その谷底には何故かポツカリと不自然な穴が空いていた。

まるで井戸をそのままスケールを大きくしような縦穴は半径十メートル以上にも及ぶ。

外から見た中は暗い。

底は見えず、太陽の光さえ深い縦穴の奥には届かない。
そんな穴の底を、一人の人影が淵から覗いていた。

赤い外套を着た女性だ。

女性は何をするでもなく、ただ中を覗き込んでいた。

「シギユン様」

穴の中から声が聞こえてくる。

どうやら女性はシギユンと言っらしい。

少しすると、穴の中から女性と色違いの格好をした黒い外套を着た中年の男が出てくる。

シギユンはそちらに視線を向けると男に声をかけた。

「どうですか？」

彼女の質問に 男はやや興奮気味に応える。

「すごい一言です！ まさかあんなに良い保存状態で発見できるなんて。間違いなく歴史的快挙ですよ！ 中の安全性も確認できましたのでシギユン様もぜひいらしてください」

「そうですか。ではお願いします」

「はい！」

男は歩き出す。シギユンも遅れて男の後ろを歩き出した。

縦穴の中は壁沿いに螺旋階段が設けられていた。

中から見た穴の中は意外に明るい。

外から入ってくる陽光のおかげもある。だがそれ以上に、壁自体が薄っすらと青い光を放ち中をぼんやりと照らしていた。
よく見ると壁の中には無数の青い鉱石が埋まっている。

石英と呼ばれる鉱石だ……それが無数に光を放っていた。

しばらく無言で螺旋階段を下る二人。だが少ししてシギユンは突如足を止めた。

男も自然と立ち止まり、後ろを振り返る。

「どうです？ 圧巻の一言でしょ。ここまでの状態を保っているなんて奇跡に近いですよ」

男は”ソレ”に視線をやりながら、シギユンに感想を求めるように声をかけた。

しかしシギユンから返事はない。

彼女はただ啞然と目前のものを見つめていた。

……二人の目の前、悠然とそびえ立つ、大きな人型のソレに。

それは巨大な、それでいて人型を模したものだった。

頭部と背中に一本ずつ特徴的な大きな角を持ち、だがそれはいま中程で折れている。

直立の姿勢を維持し、悠然と立ち、石英により全体を完全に覆われている姿は、まるで巨人の化石のようだった。

「……古代魔動巨兵」

シギユンがポツリと呟く。

聞こえた言葉に男は相槌を打つように繰り返した。

「古代魔動巨兵ですか……これを表すのにこれほど相応しい名前はないですね。

推定一千年以上前の魔動巨兵。確実に古代文明の遺産でしょう。これが解明されればきっと我が国の魔動技術も格段に進歩するかもしれないですね」

「そうかもしれない。けれど本当に……」

わたし達で解明できるのか？

男の言葉に応えながら、シギユンは疑問視する。

シギユンにはこれが自分たちの手には余る物のように思えた。

何かとてつもない力を秘めているような、パンドラの箱のように一度開けたら取り返しのつかない事になるのでは……そんな気がする。

そんな彼女の不安を察したのか、男は少し明るめの口調で言う。

「大丈夫ですよ。シギユン様なら。」

なんていったってクリシュナ国、始まって以来の天才魔動研究者なのでから。

それに足りない所は微力ながら私達もお力をお貸しします」

「そうね……ありがとう」

「いえ、それでは先に参りましょう。現在背中下部にハツチらしきものが見受けられましたので、その部位に付着した石英の切除をしておりますので、恐らく順調に進んでおればもうすぐ終わるでしょう」

「わかりました、ではお願いしまう」

「はい」

男が歩みを再開し、シギユンもまた足を進めた。

……………。

あれからしばらくの時間が経った。

遙か頭上に見える穴の入り口は薄暗くなっている。

どうやらかなり陽が落ちているようだった。

シギユンは暗い穴の底で、石英の明かりだけを頼りに一枚の紙に目を通していた。

見出しに大きく『内部調査途中経過報告書』と書かれ、その下には細かく細部まで書き込まれた何かの絵と注釈、それに長い文章が書きこまれている。

シギユンは最後まで目を通すと、ふうと疲れたような息を吐いた。

「出力石英も操作石英もない。いったいどうやって動かしていたの……いえ、そもそも古代魔動巨兵は本当に石英で動いていたのかしら」

シギユンは報告書から目を離すと、巨人を見上げる。

「中から出てきた搭乗者だと思われる遺骸、古代人に石英を使った形跡はなかった。使わなかった……使えなかったのかしら。まだ調査の必要があるわね。」

とりあえずは、これからの調査方針を考え直して国にも報告、それと――」

シギユンは再び書類に目を落とし、端の方に小さく今後の予定を書き込んでいると、

「シギユン様！」

名前を呼ぶ声にシギユンは筆を止めた。顔をそちらに向けると、慌てた表情でこちらに走ってくる男がいる。

何か不測の事態や事故でも起きたのか、と男の顔を見てシギユンは心配になるが、それは男が否定した。

「た、たいへんです！？　か、壁が魔動巨兵で、中からもう一台が！？」

ひどく興奮しているのか、早口で捲くし立てた男の言葉は意味がわからないものだった。

シギユンは落ち着いてくださいと、一言声をかけると男に質問する。

「何がおきたのですか？　順序だてておねがいします」

「す、すみません。実はさっき切り取った石英が邪魔なんで二人がかりで壁際に移動させてたのですが、ちよつとバランスを崩してしましまして……、壁に勢いよく倒してしまつたんですが、そしたら壁の一部が崩れて、奥から空洞が出てきたんです！

それで中を覗いたのですが、それが中に魔動巨兵らしきものが……」

その言葉にシギユンは自体の深刻さを考えて、表情を少しだけ張り詰めさせると直ぐに男に声をかけた。

「案内してください」

「はい！」

男が走りだし、シギユンがそれに続く。

連れてこられたのは巨人を挟んでシギユンから反対に位置する壁だった。

壁の下部には人一人なら屈めば通れそうな穴が空いている。

「ここです！」

男はその穴を指し示して、シギユンに言う。
シギユンは穴の中に身を潜らせた。
中は暗い。

暗がりの中で何とか見ようと目を凝らす。

「シギユン様、これを」

すると遅れて入ってきた男がシギユンに何かを手渡す。それは手の平サイズの石英だった。

シギユンが意思を籠めると、石英が発光しだした。

あたりが小さく照らされる。

そこは先程までいた縦穴と同じくらいある、大きな空間だ。

「あれは……」

言葉を詰まらせる。

シギユンの視線の先……、陰影を纏い、全高十メートル程の巨人が足を投げだし、壁を背に寄りかかるようにして鎮座している。

石英で覆われてなどいない。流線型のボディは黒く、不思議な光沢を放っている。

「魔動巨兵……なの？」

シギユンはそれに視線を固定したまま疑問視する。

確かに人型で、全高は約十メートルほどと、魔動巨兵との類似点は多い。

けれどこれは何かが違う感じがした。

自分達が知っている魔動巨兵とも、さきほど見た古代魔動巨兵とも違う……、何か異質な存在。

それを目の前の巨人からは感じる。

「シギユン様……」

男が不安そうに声をかける。

シギユンは、ハツとなり、内側に没頭しかけていた思考を切り替え、男に声をかける。

「急いで人を呼んでください。それと出来るだけの明かりも……一時あちらは作業を中断し、こちら優先します」
「はい！　すぐに！」

男は応え、駆け出す。

シギユンは最後まで視線をそちらには目を向けず、ただ目の前の巨人を見上げていた。

「これも古代文明の遺産……でも」

本当にそうなのか？

シギユンには違うように思えた。

巨人へと近づく。

投げ出された足、その表面に触るとひんやりと冷たい、それにツルツルと手触りが良かった。

不思議な感触だと思った。石英ではこうはいかない。

「それに腐食が見られない。傷はあるようだけど、とても年月が経ったようには見えないわ」

なんで？

様々な疑念が浮かぶ。

シギユンはそのまま表面に触れたまま移動する。

脚を辿り、そのまま胴体の近くまで移動する——と奇妙な音が響いた。

「なに……！？」

低く、連続的な音——シギユンは驚き、変わった事がないか辺りを見渡し、上を見上げたとき、

「光ってる……」

赤く発光していた。

頭部の顔に当たる部分、その両眼が赤く輝いている。

「まさかこれ動いているの！？」

シギユンは思わぬ事態に一步後ずさる——と直後、目の光もなくなり、奇妙な音も止む。

その突然の停止にシギユンはえ？ と疑問の声を上げたときだった、

プシュ！

圧搾空気が空洞に響く。

同時にゆっくりとだが巨人の胸元が上下に開らいていく。

そして開ききったとき、中から何かが落ちてきた。

「きゃっ！？」

ちょうど胸元の真下にいたシギユンはその下敷きになって倒れてしまう。

背中には地面の冷たい感触を感じる、全身は鈍い痛みで痺れていた。

シギユン痛みに瞑っていた目を開けた。

視界が少しぼやける。もしかしたら倒れたときに軽く頭を打ったのかもしれない。

そんな事を思いながら、開いた視界の先、そこには……

「にんげん……？」

シギユンの横、そこにはうつ伏せに倒れる黒尽くめの男が居た。咄嗟に古代魔動巨兵から出てきた古代人のミイラの事を思い出す。けれど男はとてもそうは見えない。シギユンは四つん這いで男に近づくと、身体に触れる。

「温かい……まさか!？」

すぐに男の顔に自分の耳を近づける。

「弱いけど息をしてる……この搭乗者は生きてる……」

あまりの事実シギユンは眉尻を寄せ、息を飲む。

『シギユン様』

その直後だった。

複数の男達の声が聞こえたのは。

どうやらシギユンの悲鳴を聞きつけて、急いで駆けつけてきたらしい。

男たちが持っていた石英の明かりで空洞がより明るく照らされる。

「シギユン様お怪我はありませんか」

男の一人が代表して声をかける。シギユンを案内した中年の男だ。

シギユンはええ、と頷いた。

「わたしは大丈夫です。それよりも直ぐにビノンテンに戻ります。医者が必要です」

そう言つて倒れている男に視線を向ける。

そこで中年の男は倒れている男に初めて気付く。

「彼は……」

聞きたそうにしている男にシギユンは簡潔に答える。

「この魔動巨兵から出てきました。まだ息があります」

「なんと！！ それはまことですか！？」

男は大仰に驚いてみせると目を見開く。

「はい、確認しました。ですから私は一度戻ります。それから――」

シギユンは一度言葉を切り、大きく息を吸うと、周囲にいる人間全員に聞こえるよう大きな声を出す。

「この事は第一級機密事項とします。ここで見聞きした事の他言はなりません」

その言葉に、場には緊迫した空気が張り詰め、皆が事の重大性を理解し静かに頷いた。

■
風が頬を撫でる。

その感触で彼は目を覚ました。

整えきれていないぼさぼさの黒髪に、黒く鋭い眼。彼、テンカワ・アキトが最初に目にしたのは、見慣れた天井などではなく、岩を切り取って造られたような天井だった。

「ここは……」

アキトは目線だけで周囲を見渡す。

ガラスの嵌っていない、吹さらしの窓。何かの石で造られた不思議な光沢を放つ箆笥。

それに自分が寝ている簡素なベッド。

他には何も無い。必要最低限だけが揃えられた部屋。

アキトは身体を起こし、

「……ん？」

そこで初めて自分が何も身に着けていない事に気付く。

来ていた筈の黒のボディスーツも無ければ、頭につけていたバイザーもない。

そう……ない。何も身に着けていないのだ。

なのに……

「見えている……」

アキトは呆気にとられたように言葉を呟くと、怪訝そうに眉を寄せ、次の瞬間には表情を歪にゆがめる。

アキトは本来なら目がほとんど見えない。過去に起きた非道な人

体実験による影響で視覚どころかその他の五感にすら影響が出て、満足な生活すら送ることが出来ない身体だった。

その為、服とバイザーに特殊なシステムを組み込み、欠けた機能を補わせることで、なんとか人並みまでの感覚を取り戻していた。逆を言えば、スーツもバイザーもなければ彼は”何も感じる事が出来ない”。

にも関わらず彼はいまその目で見る事が出来る。肌に触れる布の感触を、風が運ぶ遠くの音を、部屋を満たす清涼感の溢れる匂いを、全てを感じる事が出来る。

「何故……何故いまさら……」

奥歯を噛み締め、ギリ、と音になる。

心に去来するのは嬉しさでも、喜びでも、感動でもない。

やりきれない、怒りにも似た気持だった。

今さら戻ってなんになる——既にこの手は多くの血に汚れ、罪を犯しすぎている。

希望も未来も捨てたそんな俺にどうしろと……。

怒りに拳が震える。握り締められた拳からは血が滲んで、真っ白なシャツに赤い染みを作る。

よかれと思ってやった事なのなら、アキトにとってこんなに惨い仕打ちはない。

しかし、ふとアキトの中で疑問が浮き上がる。

「……誰が治療した？ イネスか？ 違う、ありえない。少なくとも現状の医学ではどうしようも出来ない」と断言していた」

なら誰が？ 握り締めた拳を開き、アキトは俯く。

天才をもってしても、治療不可能だと断言したこの身体を誰が治療したのか。

いや、そもそも本当に治ったかどうかすらわからない。

これはあくまでアキトの現状から見た推測に過ぎない。

もしかしたら一時的に症状が緩和されているだけかもしれない。

もしくは感覚が戻っただけで根本的な治療には至らず、いつ死ぬかわからない身体かもしれない。

わかる事は何も”わからない”という事だ。

アキトはふう、と力を抜くように息を吐き、脱力させる。

「わからないのならしょうがない。ならわかる奴に聞くだけだ」

アキトは窓に視線を移す。外には突き抜けるような青空が広がっている。

どうやらここは地球らしい。

そしてアキトに地球に戻った記憶はない。と言うよりも目覚める前の前後の記憶がまるでない。

なぜここにいるのか？ どうやって連れてこられたのか？

そんな事すらわからない。

だが、ここに匿っている者がそれらを含めて全てを知っている可能性は高い。

なら自分は動かずに待てばいい。いずれ、向こうから接触してくるはずなのだから。

アキトはじつと待つ。

ただ身体に力を漲らせ、そのときが来るのを。

■

「失礼します」

二度のノックとあまり抑揚の感じられない声、部屋に入ってきたのは赤い外套を纏ったシギユンだった。

部屋の主は執務机の上の書類から目を放し、いきなりの来訪者を
出迎えた。

「シギユンか、少し待っていてくれ。すぐに片付ける」

そう言つて書類に再び目を通し始めたこの人物はホズル・クリシ
ユナ九世。正式名はホズル・ベクト・ギロ・メゴ・キ・テイラ・ペ
タール・エグザ・ゼーヨダ。

褐色の肌に艶のある黒い髪、優しげな眦を持った、どこか好青年
と言つた感じではあるが、それでもクリシユナ王国、現国王である。
ホズルは最後まで書類に目を通すと、サインを書き込み、書類を
脇に除けると一息つく。

少しだけ椅子の背もたれに身体を預けると、いまだ入り口に立つ
シギユンに目を向けた。

「そんなところで突つ立ってないで座つたらどうだ？」

そう言つて部屋の隅にある椅子を勧める。

だがシギユンはそれに首を振ると、ホズルがいる机まで近づき、
書類の束を差し出した。

「途中までの調査報告書です」

「ああ、あれか。――八探掘場で見つかったという例の古代の遺産
だったか」

ホズルは受け取り、軽く目を通していく。

その間にもシギユンは言葉を続ける。

「ええ、期待以上のものだった。詳細はそれに全部書いてあるから」
「わかった。だが珍しいな。君が途中で投げ出してこっちに戻つて

くるなんて。あと二、三日はあちらに居ると思ったが」

「そうも言つてられない事情が出来たの」

「事情……?」

ホズルは書類を捲くる手を止め、シギユンを見た。

シギユンは一度頷くと、そう、と言返した。

「調査を途中で引き上げなければならない事情か……あまり聞きたくはないものだな。碌なものでない気がしてならない」

「どうかしら。それをどう判断するのは貴方の受け取り方次第だと思う」

「気になる言い方だな——何があつた?」

それまでの気さくな物言いを改めホズルはやや硬い口調でシギユンに問う。それに答えるシギユンはただ事実を述べるように簡潔に答えた。

「もう一台の古代の物と思われる魔動巨兵がでてきたわ、それも生きた搭乗者つきで」

「なんだと!?!」

ホズルは語られた報告に思わず立ち上がり、しかし直ぐに椅子に座りなおすと、俯き、頭痛をこらえるように片手で頭を押さえたが、直ぐに顔を上げる。

「それが事実なら驚きだが、同時に少々厄介な話だな。あまり他国に聞かせられるような話ではない」

「発見と同時に一級の機密事項にしたから、そう簡単に情報が漏れる事ないと思う。現在、発見された搭乗者は調査中の負傷者として治療を目的でここに運ばれているわ」

「最善な判断だ。それで問題はない。それで搭乗者は？」

「命に別状はない。状態も安定しているわ。今は安静に寝ていると思う」

「そうか……だが油断はできんな。それで君はどうしようと思っ
ているんだ？」

「どう……？」

シギユンは小首を傾げると、問うようにホズルを見た。

ホズルはああ、と頷き補足するように続ける。

「その搭乗者を君はどうしていきたいのかという事だ。もう考えが
あるのだろ？」

「そうね……しばらく保護して意思の疎通が出来るか試してみたい
と思う。話が聞ければ、古代文明の謎についても色々な事がわかる
と思うし、もしかしたら転用できる技術を聞き出せるかもしれない」
「そうか、ならその搭乗者については君に任せるとしよう。どうす
るかの判断は一任する」

「いいの？」

「ただし、定期的な報告と、何かあれば必ず言うように。それさえ
守ってくればいい」

「わかったわ。報告は一週間おきでいいかしら？」

「ああ、それでいい。他に報告はあるか？」

ホズルの質問にシギユンは少し考える素振りを見せたが、直ぐに
首を横に振った。

「特には……報告も終わったから戻るわ」

「そうか。無理しないように」

ありがと、そう言ってシギユンは踵を返し、部屋を出て行く。

扉が閉まり、シギユンが離れたのを確認してからホズルは疲れた溜息をついた。

「なかなか上手くないものだな……………ライガット」

久しく会っていない親友の名を呼ぶホズルの表情は、どこか遠い過去を懐かしむようだった。

■

茜色に染まる空をバックに夕焼けが沈んでいく。

部屋の中は外の景色に合わせるように徐々に暗くなっていく。

アキトが目覚めてから半日ほど、変化は意外にも早く、一人の人間の来訪と共に訪れた。

ノックもなしに扉が開かれる。

今日、一度も使われていなかった扉から入ってきたのは一人の女性だった。

雪のように真っ白な肌の上に、宝石のように輝く碧色の瞳を持つ細身の女性。フードのついた赤い外套を纏い、隙間から覗く金糸のような髪が夕焼けに照らされ、淡く光を放っている。

表情は乏しく、無表情に近い。碧という珍しい色の瞳も相まってどこか人形のような冷たい印象を与える美人だった。

女性は寝ているアキトに近づくと、その手を頭に伸ばそうとして

「!？」

しかし途中で誰かに掴まれた。

アキトだ。アキトが寝た状態で女性の腕を掴んでいる。

女性は動揺しように少しだけ目を見開き、腕から逃れようと抵抗するが、ピクリとも動かない。

アキトからしたら本当に抵抗しているのかと疑問を覚えるほど弱々しい力だった。これならまだ子供の方が強いくらいに思える。

アキトは半身を起こすと、冷たい眼差しをもって女性に質問する。

「お前らは何者だ。何が目的だ？」

嘘は許さない、言外にそう意味を含めるように、声音は低く、言葉は鋭い。

女性はビクツと肩を跳ね上げると、抵抗を止め、驚いたようにアキトを見つめると、何かを呟く。

「
」

沈黙……アキトは何も応えなかった。いや、応えることが出来なかった。

意味が通じないのではなく、もっと根本的な——言葉そのものがわからなかった。

言語が違う。予想外の壁にぶち当たりアキトは呆然となる。

そもそも言葉が通じないなど二二〇〇年を超えた現在、言葉の壁が取り払われて久しい今、ありえないことだ。

「俺の言っている事がわかるか？」

沈黙を破ったのはアキト。けれど帰ってきた返事は沈黙だった。女性は首を傾げ、困惑した瞳をアキトに向けている。

その様子にアキトは脱力すると共に、女性の手を話した。

（これではつきりとしたな……やはり言葉が通じていない……）

そんな事がありえるのか、この女性がそついう演技をしているだけなのでは……そんな疑念が芽生えるが、そもそもそんな事をする意味はない、とアキトは芽生えたばかりのそれを振り払った。

再び女性を見ると、アキトに掴まれた腕を逆の手で押さえ、少し脅えの含んだ目でこちらを見ている。

その姿に毒気を抜かれた気分になったアキトは、深く息を吐くと警戒を解き、先程の謝罪も籠めて軽く頭を下げると、身体をベッドに横たえ、目を閉じた。

女性からは戸惑った雰囲気が伝わってくるが、とてもじゃないが相手できる気分ではない。

しばらくすると女性は無言で部屋から出て行った。

（言葉通じない国？ 本当にあるのか……、それにあの女の目は純粹にこちらを気遣っているものだった……。

拘束もされず、俺に会うのに護衛もつけない……無用心過ぎるにも程がある。もしかしたら俺は何か思い違いをしているのか……）

そんな新たな疑問を残し、気がつけば夕焼けは完全に沈んでいた。

■

「シギン様どうされましたか？」

「え……？」

翌朝、その場所に入るなり、かけられた予想外な言葉にシギンは不思議そうに相手を見た。

ここは王都ビノンテンの城内、その中にある施設の一つで『工房』と呼ばれる場所で、主に”魔動技術”の研究を行っている場所である。

魔動技術とは、石英を使った技術の総称であり、医療から軍事、更には暮らしの道具にまで様々な所で使われている技術である。

この世界の人々は先天的に不思議な力を持っている。『魔力』と呼ばれる”石英”を意のままに操る力。持てる力の強弱はあるものの老若男女誰でも持っている。

石油の取れないこのクルゾン大陸では、魔力を利用した”魔動技術”というものが発展し、今では文明の根幹を成している技術である。

『工房』はそんな技術の研究を国から一手に受けた引き受けた研究機関であり、シギユンは工房の統括責任者にあたる。

そんな彼女が工房に来るのは別段不思議ではなく、普段の事なのだが……何故か入るなり、初めてすれ違った若い女性に問われ、シギユンは若干の戸惑い覚える。

「おかしいことでも？」

尋ねると、「いえ」と恐縮そうに前を置きしてから女性は話します。

「ただ、暗い御顔をなされていたので、何か悩みでもあるのかと思ひまして」

「……そう」

と——思いつめた吐息と共に、そんなに自分は顔に出ていたかどうか、と普段ならあるまじき状態に、自身の重症さを認識し、肩を落とした。

その様子に、あ、あの……、と言葉を詰まらせながらも、心配そうに声をかけてくる女性に、シギユンは少しだけ表情を和らげると、「いえ、少し考え事をしていただけですから気にしないでください。ありがとうございます」

女性に気遣いに感謝しつつ軽くお礼を言う。

すると女性は何故か頬を赤らめ、いえ！　と言った後に、失礼します！　と大きな声で言葉を続けて足早にその場から去っていつてしまう。

その様子に少し呆気にとられながらも、どうしたのかしら？　と不思議そうに女性の背中を見送りながら首を傾けた。

あれから少しして……

工房の施設内に専用に設けられた個室にて、シギユンは書類と睨み合いを続けながら重い溜息を吐いた。先程の女性のお陰で一旦は晴れた表情も、今は眉を寄せて難しい表情をしている。

「ダメみたい……」

そう言ってシギユンは机に書類を投げ出した。

「はあ……重症ね。全然集中できないなんて」

再び重い溜息をつくとき、身体を机に突っ伏した。

「古代人はこちらをどう思ったのかしら……」

少なくとも初めての接触としては最善ではないが悪くもなかったとシギユンは思う。

こちらに向けられた敵意と警戒……突然見知らぬ地で目覚めた事

を考えれば彼の反応は当然のものといえる。

けどその後に見せた彼の冷たい眼差し、

「暗い瞳……全てに絶望したように光を映さない」

まるでこちらに興味を失ったように色を失ったそれを見たとき、
シギユンは心臓を鷲づかみにされたように心が冷えた。

どんな経験を積み、人はあそこま無機質な目をする事が出来る
のか……

それを見たときから脳裏に焼きついたように、その光景が尾を引
いて離れない。

「わたしに彼の心を取り戻させることができるの？」

それは自然と零れた言葉だった。

無意識に近い。けれど確かにシギユンとしての意思が籠った言葉。
シギユンは顔を上げる。

その顔には、既に先程までの思い悩む姿は無い。

「そうね……立ち止まる時間は無い」

彼女は立ち上がると、静かに部屋を後にした。

■

王都ビノンテンは丘陵地帯を利用して出来た都である。

北の山頂に王城を築き、なだらかな斜面下るように南に放射状に
街並みが広がっている。

陽も中天に差し掛かる現在、街はかなりの活気に満ちている。

大通りは多くの人が行き交い、商店や露店通りでは商品を求めて雑多な賑わいと人だかりが出来ている。

「ずいぶんと原始的な光景だな」

アキトは眼下に広がる光景を眺めて、呆れた様にぼつりと感想を述べた。

アキトが居る場所は王城の一室。そのせいもあって部屋の窓からは街全体をよく見渡す事が出来る。

「まるでここだけ時代から置いていかれたような光景だ」

アキトが言うように、街にビルなどの近代的な建物は見られない。全ての建物が石を削って造られたような外観であり、どこか街全体が遺跡然とした雰囲気がある。

アキトはそのまま窓枠に身体を預けると疲れたように肩をすくめた。

「ほんとに分らない事だらけだな。身体の事、ここがどこなのか、そして目覚める前後の記憶の欠落……せめて言葉が通じれば、もう少し情報を得られるんだが」

そう言ってアキトは遠くを見つめる。

遠くに広がる光景は、青い空に、一面の荒野。

なんとなく火星の面影と重なる。

最後に火星にいつだったか……ふいにそんな事を思い、思い出すとした時だった。

コンコンとノック音が部屋に響き渡る。

アキトが振り返り、少しすると扉を明けて誰かが入って来た。

目立つ赤い色の外套に、金髪翠眼の女性。いまだ記憶に新しい、

昨日も訪れた女性だった。

その姿を見てアキトは意外だな、と少し感心したような視線を女性に向けた。正直、昨日あれだけ怖がらせてしまつて、また来るとは思つていなかった。

しかし女性はいま、部屋の入り口に立っている。

もしかしたら案外かなり肝が据わっているのかもしれないと、アキトは相手の評価を少しだけ改め——そして昨日は持つていなかった、ある物に自然と目がいった。

それは厚さ五センチ程の、薄汚れた古めかしい本だった。

女性は胸の前で本を抱き、そのまま真つ直ぐアキトの居る窓際までやってくると、アキトから三歩ほどの距離を置き立ち止まり、

「――」

何事かを呟くと、視線をアキトから外し、ベッド脇の机を指し示す。

（座れと言っているのだろうか……？）

アキトは机を見た後に、確認するように女性を見た。
すると女性は頷く。

意外と言葉が通じなくても簡単な意思疎通ならどうにかなるものらしい……

アキトはどうするか少し悩む素振りを見せるが、

（別にいいか……）

と、女性に促されるまま椅子に座った。

女性は机の上に本を置くと、アキトの対面に腰を下ろす。
さてなにが始まるのか……

アキトは少し興味を抱きつつ、女性の行動を待つ。

だが返って来たのは沈黙。

女性は何をするでもなく、その翠瞳でもって、ただじっとアキトの顔を凝視する。

何がしたいんだ……？

一分……二分と時間が過ぎ、三分が過ぎようとしても、ただ沈黙を守り、何も行動を起こさない彼女にアキトが流石に疑問を覚え始めた頃……突如、女性が沈黙を破り動いた。
細くしなやかな指で自らを差し、

「シ・ギユ・ン」

一音、一音、区切りながら、はつきりと、そしてゆっくり言葉を
呟く。

女性は繰り返す。

「シ・ギユ・ン」

そこで区切り、アキトの反応を窺うように顔を見上げてくる。

（これはひょっとしなくても、俺に名前を教えようとしているのか……それに）

アキトの目から見て、こちらを見つめながらじっと待つ女性の姿は、名前を呼んでもらうのを期待して待っているように見える。

アキトは肩の力を抜くように短く息を吐き出すと、

「しぎゅん」

短く女性の名前を呼ぶ。

ただ音を発するだけの様な、感情の籠らない無機質な声。発音さえあっているか怪しい。

それでもシギユンは表情は緩めて、心から喜ぶような微笑を浮かべた。

その姿にはアキトも一瞬目を奪われる。

初めて顔を合わせた時から表情が乏しく、その整い過ぎた容姿からどこか人形めいた冷たい印象を抱かせいた女性。その彼女が一変して見せた、温かい花の様な笑顔。だかこそアキトの目をここまで引いたのかもしれない。

女性は喜びを噛み締めるように一度目を瞑り、開くと、今度はアキトを指差した。

その意味も察し……アキトは心の中で苦笑。
そして、

「アキト」

ぼそり、と素っ気無く呟く。
シギユンは僅かに首を傾け、

「あきと……？」

多少イントネーションがおかしいものの、アキトの名前を口にすると、彼女は確認するようにアキトを見る。それから何度か口の中でその名を繰り返し、

「アキト」

次に口にした発音は完璧だった。

これにはアキトは僅かに目を見開いたものの、ああ、と短く返事すると曖昧な苦笑を浮かべるのだった。

■
「少し驚いた……、アキト、あなたがこんなに早く喋れるようになるんて」

「だとしたら多分、教える側がよかったんだろ」

日が西に傾きかけた部屋、シギユンの言葉にアキトはおどけたように肩をすくめる。

……あれから十日。

二人が名前を交し合ったあの日からそれだけの時間が流れようとしている。

机を挟み対面に座ったシギユンは、僅かに表情を緩めると、手に取ったカップのお茶を一口、舌を湿らせると、カップを置いた。

「話は変わるけど……、今日でこの授業も終わりにしようと思うの。喋るだけなら、もうそんなに心配いらないみたいだし、後は慣れだと思う。だからここからはアキト、あなたにいくつか聞きたい事があるの。それに答えて欲しい。勿論こちらもあなたが知りたいことがあれば答える」
「……………」

アキトは僅かに眉を顰め、少しの間を置いてから、

「そうだな、別に構わない。こちらもいくつか確認したい事があったし……だが答えたくない事に対しては喋らない」

「それでいいわ……じゃあ、先にアキトから質問して。わたしは後でいいから」

「……わかった」

と、アキトは一度頷き、早速質問をなげかける。

「まずは一つ目だ。ここどこだ？」

「ここは王都ビノンテン。クリシュナ国の首都よ。クルゾン大陸の南部に位置する街よ」

「クルゾン大陸……？」

どこだそれは？ とアキトは僅かに眉を寄せ、訝しむようにシギユンを見るが、彼女は真面目な表情で少しだけ首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや、何でもない。続きだが、どうして俺がここにいるのか、簡単な経緯でいいから話してくれないか」

「わかった——」

シギユンは話し始める。採掘場で発見された古代の遺産の調査に出向いていたこと、そこでアキトを見つけたこと。衰弱していたので、ここまで運び治療したことなど……

アキトは聞いた後、眉間に深い皺を作り、少しの間沈黙していたが……しばらくすると顔を上げ、深刻な表情でシギユンに話しかけた。

「一つ確認する。今は何年だ……？」

「……七九〇年だけど」

「……………」

シギユンの答えにアキトは表情を凍りつかせ、完全に黙り込む。アキトがいた時代は二二〇〇年。けれど彼女は七九〇年と言った。

シギユンを見る。だが彼女が嘘を言っているようには思えない。そもそもこんな事で彼女が嘘をつく必要がない。後で調べれば直ぐに分る事だ。

（ここは……………本当に俺のいた時代ではないのか……………）

驚き、困惑、戸惑い、湧き上がる感情の中に不思議と焦りはない。普通なら突拍子もない現実を前に、もっと焦り、取り乱したりするものなのかもしれない。

だがアキトにはそれをすんなりと受け入れられるだけの、経験と知識、それに可能に出来るかもしれない技術が彼の世界にはあった。『ボソソジャンプ』…………アキトの世界ではそう呼ばれる技術がある。

この技術は一種の瞬間移動技術だと思われるが、その実は時間と空間を跳躍する技術である。

過去にアキトはこのボソソジャンプの暴走で、数日前の過去に飛ぶという経験をしているが、詳しいことは割愛する。（気になる人はナデシコ本編をどうぞ）

それを考えれば今のシギユンの答えも、ありえないと頭ごなしに否定できるものではない。

けれどそうになると、新たな疑問が生まれる。

ボソソジャンプは通常、瞬間移動技術と呼ばれるだけあり、時間の跳躍など起こらない。

その事例が無いこともないが、数えるほどであり、どれも偶然と事故が重なったもので、いまだ人為的には成功していない。

となると…………

アキトは事故、もしくはそれに近い状況で、ここに跳ばされた事になるが…………アキトにはその記憶はない。

というよりも、それを含めたここで目覚める前の前後の記憶がなかった。

（恐らくボソソジャンプ時の影響だと思うが……）

考えられる可能性を推測するが、記憶のないアキトにはハッキリとした事はわからない。

こんな時に金髪白衣の説明好きなあの人が居てくれれば……
そうも思わなくてもないが、居ないものを当てにしてもしかたがない。

アキトは短く溜息をつく。

新たな謎と疑問が増えた。だが、わかった事もある。

時代に取り残された旧暦然とした街並み。通じない言葉。それに聞いた事のない地名。

どれもおかしく、不自然に思っていた点。

だけどそれも、文明が違うというのなら納得がいく。

「アキト……」

その声で、アキトは考えに没頭していた意識を浮上させる。
見ればシギユンが、心配そうな眼差しでこちらを見ていた。
窓から差し込む日差しもいつのまにか茜色になっている。どうやら思っていたよりも長い時間、考えに集中していようだ。

（少し悪い事をしたかな……）

アキトは少しだけ表情を緩め、長時間待たせてしまったことを謝罪する。

「すまない。考え込んでいたようだ」

「気にしないで……少し険しい表情をしていたから心配になっただ

けだから」

怒る素振りも見せず、シギユンは首を横にふる。

「でも、だいぶ時間は遅くなったみたい……もう直ぐ日も落ちるし、続きは明日にしようと思うのだけど」

「ああ、それで構わない」

「では、明日も今日と同じ頃に」

そう言って、シギユンは椅子から立ち上がる。

こうして一日目はアキトが一方的に質問しただけで終了した。

■

二日目。

初日とは逆の光景が繰り広げられていた。

「やはりアキトはこの時代の人間じゃない？ それは間違いないのね」

「ああ、そうだな。少なくともここは俺の知る世界じゃない。だが俺が君の言う所の古代人かどうかは分からない」

アキトは軽く首を横に振る。

シギユンは考え込むように腕を組んだ状態から口元に右手を置き、少しの間を置いてから再び質問する。

「でも文献には古代文明人は熱と油と相性のいい金属という媒体を頼っていたと聞け。そして話を聞く限り、アキトの時代も同じ技

術が使われていたのよね？」

「そうだな……確かに俺がいた時代でも金属が中心だった。ここが金属とは全く違う物質を使った工学が発展している事はシギユン、君の話で分かった。」

「もしも金属を使った文明が過去のモノだというのならここは未来、君からとったら俺は過去の人間になるのかもしれない」

信じ難いが……とアキトは心の中で付け加える。

シギユンの言うことが正しければ、アキトのいた文明は遠くない未来滅びる事を意味している。

文明は始まった時から滅びの道を歩み始める。昔、誰かが言っていた言葉をアキトは思い出すと共に、なんとも言えない気持ちにさせられてしまう。

「ところで、最後に大きな疑問が残ったのだけれど……」

少し上の空になっていたアキトをシギユンの言葉が引き戻す。アキトはシギユンを見る。

そこには相変わらぬ感情に乏しい美貌があった。宝石のような鮮やかな色をした翠の瞳がまっすぐとこちらを見据えている。

「なんだ？」

アキトが返すと、シギユンは続ける。

「あなたが過去の文明の人間だと仮定して、あなたはどのように生きていられたの？ 既に過去の文明は数百年以上も前になる。」

現に同じ場所で発見された、もう一人の古代人は既にミイラだった。もしかしてアキトのいた文明では不老不死が確立されていたの？」

アキトはそれに頭を振って答える。

「いや、それはない。俺の知る限り不老不死など実現されていない」

「そう……でも、だとしたらどうして？」

「時間……君ならこう言えばわかるだろ？」

「……………まさか!？」

シギユンは何かに思い当たったのか、珍しく大きく目を見開きアキトを凝視する。それに対しアキトは冷静に返す。

「ああ、想像の通りだ」

「つまりそういう事なの……ほんとうに……そんな事が可能なの？」

その表情はありえない、と否定の感情がありありと浮き出ている。アキトはその様子に苦笑。一度天井を仰ぎ見て、

「ああ、事実俺の世界にはそれを可能とする技術が不完全ながらあった。恐らく俺は何らかの理由で時間を越えてここにやってきた……という事になるのだらうな」

考え込むように腕を組んで、視線を元に戻す——と、視線の先でシギユンが俯いている。

アキトからはそれ以上何かを言うことはなく、彼女の反応を待つ。すると少しの間を置き、顔を上げた彼女は真剣は瞳で、やや思いつめた表情でアキトに話しかけた。

「そう……すんなりと信じられる話じゃないけど、確かにそれならあなたが生きていたことも、一緒に発見された魔動巨兵に時間の経

過による劣化が見られなかったのも、一応の説明はつくわね」

「魔動巨兵？」

「ああ、そういえばアキトにはまだ説明してなかったっけ……。さつきも少し話しに出たように、わたしたちの文明は金属の変わりに石英と呼ばれる鉱石を使っているの。」

その石英を使って作られた全高十メートル程の人型の兵器をわたしたちは魔動巨兵と呼んでるの」

「人型兵器……」

そう言われてアキトが真っ先に思いついたのはエステバリスと呼ばれるアキトの世界でのロボットだった。

「その魔動巨兵というのが俺と一緒に見つかったのか？」

その質問にシギユンはええ、と頷き言葉を続ける。

「正確にはアキトはその魔動巨兵の中から出てきたの」

彼女の言葉にアキトは黙り込み、考える。

人型兵器と一緒に発見されたと言われた時点で何か関係がある……

…とは思ったが、自分がその中から出てきたとなれば、もはや疑うまでもない。

（間違いなく俺が乗っていたというその魔動巨兵は、俺の世界のものだろうな。ならもしかすれば……）

機体に記録が残っていればボソソジャンプ当時の情報が何か掴めるかも知れない。それがわかれば欠落した記憶を取り戻すための突端になる可能性もある。

(調べる価値は十分にあるな)

アキトは考えを纏めるとシギユンに話しかけた。

「ちょっといいか——」

そしてある提案をシギユンに持ちかけた。

序章 2（前書き）

大幅に話数が減って驚いている方がいたら申し訳ありません。

ちよつと話のテンポを上げるために、以前のは無駄な部分を省き、一つに纏めさせていただきました。

あのひつぱり具合で月一更新とか……いつ終わりが見えるのか分らないので……ちよつと反省。

という訳で、これからは話のテンポをあげてお送りします。

一応、前回の最後からの続きですので、無理に読み返す必要はありません。

興味がある方だけ覗いてみてください。

序章 2

赤い背中を追って黒い外套を着た男が廊下を歩く。

前者はシギユン。後者はアキト。

両者が質問をぶつけあったあの日から既に数日が流れている。

二人とすれ違った者は例外なく挨拶の後に好奇の視線を向けてくるが——それを一方は慣れた様子で、一方はひたすら無視を決め込んで、それらの視線をいなしていく。

だがアキトは突如立ち止まると、シギユンに声をかけた。

「なんとかならないのか」

不満を表すようなぶっきら棒な物言い。

シギユンは立ち止まり、振り返り、

「なにが？」

そう言って首を傾げた。アキトは短く嘆息する。

「なにがって、この視線が……だが」

アキトが周囲を見渡すと、さっと視線が反らされた。

その様子にああ、とシギユンは納得したように頷くと、ちょっとだけ口元に悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「無理ね」

キッパリと言った。

「言ったでしょ。わたしは魔動工房の最高責任者だつて。そのわたしと一緒に居るのだから、これぐらいの視線はしかたないと思う」
「それだけじゃ……いや、なんでもでない」

言いかけて——しかし口を噤む。

ときどき好奇心と物珍しさ以外に混ざる、敵意にも似た視線。内訳は嫉妬と羨望だろうか。特に男からの視線はひどかった。

この程度の視線では、殺意が渦巻く戦場を駆けていたアキトにとつてどうと言う事はないが、それでも続くかと思うと辟易する。

溜息を一つ吐き、アキトは歩みを再開。それを見てシギユンも歩き出した。

今度はシギユンがアキトの背中を見る形になり、背後から声をかける。

「言いかけて止めるのは、どうかと思うのだけど」

「そうか？ まあ大した事じゃない。気付いていないのなら、それでいいだろ。それよりも——」

そこで言葉を区切り、アキトは首だけで振り返りシギユンを見る。その意味を察したシギユンは二歩分、アキトとの距離を詰めた。ぴったり背中につく形になる。

それを確認したアキトは前を向き、彼女にだけ聞こえるように声の大きさを落とし、話を再開する。

「本当に俺が魔動研究者になる必要があつたのか。確かに遺跡に行きたいと言った。それに見合う見返りも、俺に出来る範囲でなら

返すことも約束した。だがわざわざ役職につく必要があるのか？」

「絶対に必要があるとは言わない。けれど物事スムーズに進めるためには必要な事よ。わたしはアキトに見返りとして、あなたの知る知識と技術を教えて欲しいと言った。だけど、それだけの為に、あなたに魔動研究者としての肩書きを与えたわけじゃない。

一つは遺跡に行く手続きが簡単にするため。全くの部外者とそうでない者では全然違うから。もう一つはあなたの選択肢を広げるため」

「選択肢？ 随分と寛容なんだな」

廊下の突き当たりに行き当たり、その先に続く螺旋階段の前でアキトは立ち止まると、振り返る。

シギユンも足を止め、見上げた形でアキトを見返した。

「わたしは別にあなたを拘束して、一生この場所に縛り付けようとは考えていない。ここに住むも、外にでるのもアキト……あなたの判断に任せようと思う。もっとも外に出る場合はある程度の制限がつくかもしれないけど。でもどちらを選択したとしても、きっと今の立場はあなたの役にたつはずよ」

ちゃんと働きに見合った給金もですし、とシギユンは最後に付け加える。

その言葉にアキトは少しばかりの呆れた眼でもって応えた。

はつきり言ってシギユンの考え方は甘い。

だいたいの場合、情報をもたらした者の末路は決まっている。

他国に同じ情報がもたらされるのを防ぐために消されるか、もしくは一生飼いきれにされるか、そのどちらかだ。

けれど彼女は自由を与え、更に下地まで用意してくれるという。

アキトからしたら本当に甘くて、お人好し過ぎるぐらいに過ぎる考え。だけど……

ふっとアキトの口元が緩む。

「悪くないな」

「お給金が出るのがそんなに嬉しかったの？」

少し的外れなシギユンの回答を聞きながら、二人はゆっくりと螺旋階段を下っていった。

■

工房とは城内にある一つの施設を指すのではなく、城内にある魔動に関連する全ての施設の総称である。

生産区画、研究区画、研究・実験格納庫、と大きく分けて三つに内訳できる。

生産区画は主に弾や弾帯など、軍で使う魔動巨兵の消耗品の生産を担っている。その関係上軍の格納庫とも近い。

研究区画は既存の技術の改良、もしくは新技術の開発を担っている場所であり、研究・実験格納庫は主に魔動巨兵の実験と研究成果をみるための場所である。

中でも特に研究区画は最もシギユンの出入りが激しい場所であり、この中に彼女専用の個人部屋がある。

そして現在……

アキトとシギユンの二人は、その部屋で対称的な表情で睨みあっていた。

「これからしばらくアキトには魔動工学の基礎を学んでもらいます。その間にこちらで採掘場への許可手続きをとっておくので頑張るよ
うに」

「この本全部を読むのか……」

アキトの視線の先にあるのは大量に積み重なった本の山。机に乗り切らない分は床にも積み重なっている。全ての本がハードカバーの分厚い本だという事を考慮しても、その量はとても十冊や二十冊じゃ収まらない。

アキトはその本の絶壁とも言えるもの目にして引き攣ったように表情を強張らせ、一方でシギユンはそのアキトの様子をおかしそうに、少しだけ表情を柔らかくすると、口元には微笑みを浮かべている。

「ええ、そう。アキトの言葉の習得速度から見ても、そんなには時間はかからないはずよ。せいぜい一週間もあれば余裕のはずよ」
「これを一週間」

「ぐくりとアキトの喉から音が鳴る。

とてもではないがこの本の山を見ると、可能とは思えない。

「そんなに嫌そうな顔しないで。一週間もあれば許可もおりるから——だから頑張りましょ。では、まずはこの本から」
「あ、ああ」

こうしてシギユン先生のスパルタ授業が幕を開けた。

一日目。

「ここがこうで、ここがこう」
「では、ここは？」
「それはこうよ」

二日目。

「次これ解いてみて」

「これ一冊全部か……？」

「そう」

「三百ページはあるが」

「大丈夫、アキトなら出来る。制限時間は四時間ね」
「……………」

三日目。

「少し休憩を取らないか？」

「もう少ししたらにしましょう」

「もう二日寝てないが……」

「大丈夫。わたしも寝てないから。後一日徹夜したら休憩にしまし
よう」

「……………」

とんで六日目。

「…………… 今日で何日目だ」

「恐らく六日目だと思う。それと寝ちゃダメよアキト。最近のあな
た喋りながらでも寝ているときあるから」

「……………」

「あ、そこ間違ってる」

「……………」

七日目。

「ごころうさま」

「本当に終わるとはな……………」

「それはアキトが頑張ったからよ」

「そうか……………」ところで寝ていいか」

「あつ、こんな所に一冊挟まってる。見落としてたみたい。これが終わったなら寝ていいわよ」

「……………」

ゴン！

アキトは強かに机に頭をぶつけた。

そんなこんなで八日目。

「生きてるって素晴らしいな」

「なに言ってるの？」

シギユンの呆れた眼差しを受けながら、アキトは天を仰いだ。

本日は晴天。雲一つない突き抜けるような青空が広がっている。

現在二人が居るのは、王都から車で三十分ほどの距離にある、”

第117石英採掘場”。

地獄のような一週間を乗り切り、遂に許可が下りたという事で二人は早速”遺跡”に来ていた。

「それにしても随分と深い穴だな」

アキトが縦穴の淵から下を覗き込み言う。

中は奈落のそこに続いているのはと思えるほど真っ暗で底が見えない。

「そうね、底までは二十メートル以上あるから。それよりも先に進みましょう」

シギユンは底へと続く、螺旋階段に足をかける。アキトもそれに続いた。

「これは……」

下る途中、目にしたものにアキトは感嘆の声をあげる。

穴の中央に、威風堂々と佇む沈黙の巨人。

石英に包まれた姿はまるで彫刻か何かのようで、動きを止めて長い時を経ても尚、その存在感を誇示している。

「最初はこの古代魔動巨兵の調査でここに来ていたのだけど、思わぬ拾い物をしたから」

そう言っ、シギユンは古代魔動巨兵に向けていた視線をアキトに向けた。

「拾い者は俺ということか」

アキトは困ったような、そんな苦笑を浮かべ、周りを見回す。

「ところで、人が全然いないようだ……」

「ああ、もう調査自体は全て終わってるから、今はここに人はいないの。もっとも分ったことはほとんど分らないという結果だったけど」

シギユンは少しだけ暗い顔をするが、すぐに表情を戻しアキトを見る。

「そこでお願ひがあるのだけど……」

「なんだ？　今なら本と睨めっこ以外なら何でも許せる気がするが」
くくつとアキトは僅かに口角を上げる。

「ならお望みどおりにしてあげようかしら」

じと眼でみてくるシギユン。アキトはその視線に沈黙した。

「……………すまない」

「ふう……………まあいいわ。それでお願いだけど、後で一緒にこっちの魔動巨兵の方も調べてくれないかしら？　アキトが気づいた事を言ってくれるだけでもいいの」

「ああ、そんな事でいいのなら」

「そう、じゃあお願いね。それとそろそろよ」

その言葉にアキトは視線を先に向けると螺旋階段の終わりが見えていた。

序章 2（後書き）

今回は少しコメディー色が強かったかな……と思いつつ、少し反省
久しぶりにナデシコを見ながら書いてたらこんなになってしまいま
した。

シギユンの正確が少し変かも……と思わなくもないですがご容赦く
ださい。

今回は修正するために、量も少ないし、あげるのに時間もかかって
しまいました。

今回は一気に書き上げて序章が終わるところまで行く予定です。

こんな駄文ですが、また読んでもらえたらと思います。ではでは。

序章 3（前書き）

ちよつと時間が出来たので、途中だけと上げる事にしました。

序章 3

「……………」

螺旋階段の先……壁を一枚隔てた別の空間にソレはあった。

薄明かりだけが照らす無人の空洞内。その最奥にひっそりと鎮座する、漆黒の鎧を纏う全高八メートル程の巨人。

分厚い装甲に覆われた姿はフルプレートを着込んだ騎士のような出で立ちを彷彿とさせ、纏う闇はその存在感を否が応にも見るものに認識させる。

二人は空間の入った所で足を止め、その巨人の姿に見入っていた。

「……ブラックサレナ」

しばらく経ってから、アキトがぼつりと呟く。それは重い（想い）響きを持った声だった。

シギユンが反応する。

「ブラックサレナ？ それがこの魔動巨兵^{ゴレム}のコードネームなの？」

首を傾け、問うようにアキトを見上げる。アキトは巨人を見据えたまま応えた。

「ああ。ブラックサレナ……俺が乗っていた機体だ」

アキトは歩みを再開する。シギユンも続いた。

歩きながらシギユンはアキトの背中に話しかけた。

「アキトはこれに乗っていたと言っていたけど……やっぱり戦って

いたの」

「そう……だな。俺はこれに乗り多くの人を殺した」

「……………」

「軽蔑するか？」

「そんな事はない。わたしは研究者だけど……けど、人を殺すための道具を作っている事に変わりないもの。そんな綺麗ごとを言う資格はわたしにはない」

「……強いんだな」

「え……！？」

シギユンは思いもしなかった言葉をかけられ、目を見開きアキトを凝視する。

アキトは立ち止まり、首だけをこちらにむけ、

「いや、なんでもない」

そう言っただけで困ったように目尻を下げた。その表情はとても悲しそうで……何か言葉を、そう思うがシギユンは何を言っているかわからず結局口をつぐんでしまう。

再び歩きはじめるが——二人の間に会話は無い。

しばらく静寂が場を満たす……が、それも二人がブラックサレナに辿り着く間までだった。

アキトは立ち止まるとシギユンに話かける。

「それよりも、俺はこれからこいつを調べる。シギユンはどうする？」

「わたしも一緒に……見てるだけでもいい」

「……そうか。なら少し危険だからここで待っていてくれ。」

アキトはシギユンの返事を待たずに、そのままブラックサレナに

近づき、投げ出された下腿部に手をかけると、さっと飛び乗った。そのまま脚の上を歩いて行く。

高さ二メートルはあるのに、軽々と飛び乗るアキトの身軽さにシギユンが驚いていると、アキトは足を辿り、胸元に行き着く。

そこからアキトが胴体に触れ、何かをしたと思った直後——反応があった。

シギユンがいつか見たときみたいに、目元が赤く光り、圧搾空気が抜ける音が空洞内に響き渡る。そのすぐ後に、胸部が静かに上下に開放され、あつという間に搭乗口への入り口が露になった。

アキトは搭乗口に足をかけ、

「こちらに来てくれ」

とシギユンに声をかける。シギユンは言われた通り、サレナの足の間を通り、胸元まで辿り着くとアキトを見上げた。

「どうやって昇ればいいの？」

シギユンから見てアキトの高さまで二メートル以上ある。とてもシギユンには梯子でもなければ上れない。

「すこし待ってくれ」

アキトはそう声をかけると、開かれたハッチの足元に手をかけ、何かを操作する。

すると取ってのついたワイヤーが、上部のハッチから蜘蛛の糸が垂れ下がるようにシギユンの前に下りてくる。

「その取っ手に足をかけて、しっかり掴まれ」

シギユンは頷き、言うとおりに掴まると、スルスルとワイヤーは元に戻ろうとシギユンの身体ごと上に持ち上げて行く。

そしてあつという間にアキトと同じ目線の高さまで彼女を運んだ。アキトをは手を伸ばし、シギユンはその手を取った。ワイヤーは彼女が手を話した途端、最後まで昇りきり、ハッチの中へと吸い込まれていた。

アキトはそのままシギユンの手を引き中に入る。

「中はそんなに広くない。足元に気をつけてくれ」

シギユンは中を見回しながら、

「ええ」

と頷いた。

確かに中はそんなに広くはない。中心にはパイロットシート、それに対面には今は足元に下がっているが、操縦桿やコンソールなどもあり、人が二人も乗ったらキツイくらいだ。

アキトがシートに座り、促されてシギユンはその横につく。

すると、今まで足元に下がっていた操縦桿が上がり、座るアキトの前に来た。

操縦桿はシートに向って下部前方から『Yの字』に伸びており、左側にスティック、右側には窪んだ穴が空いているだけで何もない。けれどアキトが右手の手の平を穴に置いた瞬間——変化が起きた。それはただの穴ではなく、IFSと呼ばれるものの専用のコンソールだった。

イメージ・フィードバック・システム、その頭文字をとってIFSと呼ばれるそれは、コンピュータとのダイレクトリンクを可能とするものだった。IFSを施した人間は必ず、右手にその証とも言える、不思議な模様が浮かぶ。

触れたアキトの右手の甲は薄っすらと輝き、今まで暗かった中には照明が灯されていく。左右の壁には計器や外の景色が映し出され、少し前までとは見違えるように中は変わっていた。

その光景にはシギユンは目を奪われ——アキトに視線を戻したとき、彼女の目が一際大きく見開かれる。

「アキト……それ」

震えた声で呟いたシギユンの視線の先……アキトの顔には幾何学模様の複雑な線が浮いていた。模様からは虹色の光が漏れている。

アキトは苦笑して一言、

「気にしないでくれ。どうしても出ちゃうんだ」

普段とは違う優しい口調で、シギユンに語りかける。その雰囲気の違いにシギユンが戸惑い、それ以上は何も聞けなかった。

そんなやり取りの間にも、空中には多くのディスプレイが映し出され、『おかえりなさい』『おまちしておりました』など日本語でデフォルメされた文字が浮かんで消えて行く。

「なんて書いてあるの？」

気になったシギユンが尋ねると、アキトは、歓迎するとき、と短く返した。

「俺はこれから少し集中する。少し待っていてもらっていいか」

「ええ、わかった」

その言葉を聞き終えるとアキトは目を閉じた。意識を自分の中へと集中していく。

『状況報告』そうブラックサレナのAIに命令すると、次々に情報がIFSを通してアキトに流れ込んでくる。機体の状態、自分のバイタル、ここ最近のログ。

時間が経つにつれ、あまり結果が堪ばしくないのかアキトの表情が険しくなっていく。

（バイタルは正常。身体に関しては今の所問題ないようだな。だが原因がわからない。これもボソソジャンプの影響なのか……？

肝心のログは消失……恐らく一部の電装系がやられたせいだろうが……機体の状態が悪すぎるな。自己診断もどこまで当てに出来るかわからない。

原因はボソソジャンプ時の過負荷とみるべきか……これだけ無茶なジャンプだし何が起こしてもおかしくはないか。あとは……バッテリーの残量が七十パーセントを切ってる。現状では心許ないにもほどがあるな）

ふう……、アキトはIFSコンソールから手を話して疲れたように息を吐いた。

一番知リたかった内容が記されている筈のログは消失——この事実はアキトにとって非常に痛手だった。これではここに来た意味の半分以上が失われる。

ログは過去の記録全てが記されている。例えば最後に整備を受けたのはいつか、戦闘を行った日付、時間、損傷の度合い、更にはどのような行動をとったかなど……

アキトはそこからボソソジャンプを行った日付、それに自身の記憶の空白の期間に何があったのか……それをここから知ろうと思った。

だが結果はログの消失という最悪と言っているものだった。アキトも頭痛を堪えるように片手で頭を押さえる。

——と、

「大丈夫？」

心配したシギユンが横から声をかけてくる。それにアキトは手を話し、ああ、と頷いた。

「問題ない。ただ、あまり結果がかんばしくなくてな」

「何しての？」

「ログ……と言ってもわかんないか。記録を見てたんだが、俺の知りたかった事は何もわからなかった」

その言葉にシギユンは顔をしかめ、不思議そうな顔でアキトを見る。

「記録……紙等の媒体もなしにそんな事わかるの？」

「ああ……そうか。こちらにはそういう技術はないんだったな。なんとはいいいんだろうな……俺たちの時代の技術には紙以外の媒体で記録が残す方法があつて、これもその一つだ」

「……その記録ってわたしでも見れる？」

「見れない事もないが……言葉が違つし、見ても分らないと思うが」
「それでも……お願い」

真剣に眼差しで懇願してくるシギユンに、アキトは短く吐息。そして脱力すると、

「わかった」

そう言つて、アキトは再び右手をコンソールに手を置く。
すると、視界一杯にいくつものディスプレイが展開され、次々に色々な情報が表示されていく。

目まぐるしく次々に切り替わる画面に目を奪われながら、シギユンは独り言のように呟く。

「ただ取り込んで投影しているだけの、こちらの技術とは根本的に違うのね。それに……いくつかの文字は見たことある。やっぱり……」

そこまで言って言葉を区切り、アキトに視線を向けると、ありがとう、と声をかけた。

アキトは一斉に画面を消し、

「何がやっぱりなんだ？」

コンソールから手を離しながら、シギユンを見た。

「いえ。ただ、いま見たものにわたしが以前、古代の文献を見たときと同じ様な文字が使われていたから……やっぱりアキトは古代人なんだなって」

「そんなものがあるのか……あとで戻ったら見せてもらってもいいか？」

「ええ、大丈夫よ。城の大図書館にあるから。持ち出しは出来ないけど工房の人間なら誰でも閲覧できるわ」

「そうか、なら頼む」

ええ、とシギユンは返事をし、そしてピット内を見回しながら、ところで新たに話をきりだす。

「もう少しコレの説明を詳しくしてもらってもいい？」

彼女は瞳に映る様々な機械に目をやりながら、アキトに願います

るのだった。

■

あれから二時間ほどが経ち……ようやくピッド内から出てきた二人。

現在、もう一体の古代魔動巨兵の元へと向っていた。

「やはり古代文明はわたし達の文明より遙かに高度な技術を持っているのね……石英を一切使わずに動くなんて不思議」

「俺から言わせれば何の動力源も持たず、人の力のみで動く魔動技術の方が不思議だと思うが」

「それなのだけど……アキトは魔力を持っていない。それに先に見つかった古代魔動巨兵の兵搭乗士も石英を使った形跡がなかった……アンダー・ゴウレム。だとするとやはり古代人は魔力を持たなかった事になる………ならわたし達は」

言葉を詰まらせたシギユンは俯き、思いつめた表情で考え込んでしまう。アキトはそんなシギユンの頭に優しく手を置いた。シギユンの足が止まる……けれど抵抗はない。アキトはそのまま軽く撫で、「何を考えているかはわからないが、そんなに深刻にならなくてもいいんじゃないか？ 例え古代の人間が魔力を持っていなかったとしても——過去がなければ現在（今）はない」

「それって……」

言葉を止めてアキトを見る——けれどアキトからの返事はない。

アキトは手を離すと歩みを再開。シギユンもそれに慌てて続く。
しばらく歩き、

「ねえ、さっきの言葉の意味だけど」

シギユンが唐突に問いかけると、アキトは苦笑を浮かべ、

「そのままの意味だ。それよりもついたぞ」

曖昧に応え、あからさまに話題を逸らす様に視線を前に向ける。
シギユンも釣られるようにして前を向くと、目の前には青い石英
に包まれた魔動巨兵が悠然と佇んでいた。

「調べて欲しいと言っていたが、中には入れるのか？」

アキトは古代魔動巨兵を見上げながらシギユンに尋ねる。
アンダー・ゴウレム

「ええ、背中側から……そこの足場を使って行けるようになってる」

その説明に、アキトは頷くと足場に向けて歩き出した。

背後に回ったアキトが目にした魔動巨兵の背中は、確かにシギユ
ンの言うとおり一部が切り抜かれたように石英が綺麗に除去されて
いた。

中へと通じるハッチは上へと開きっぱなしになっている。

「入っても大丈夫か」

「ええ、中の調査は既に終わってるから」
「そうか」

アキトは短く応え、ハッチに手をかけると、身体を搭乗口の中へ

と潜り込ませる。

中は暗く、狭い。

ブラックスレナのビッド内と比べれば広さは半分以下しかない。

一人が乗るだけでも手狭な感じだった。

シートは何故か背中側に向って背もたれがあり、上部には体幹固定用と思われるロッキングバーが上に伸びている。

「これは対面座席か……変わってるな」

アキトはシートを一瞥。珍しそうに呟くと、そのまま身体を前に乗り出し、背もたれの影になって見えない前壁面を覗く。

恐らくそこに操縦桿なり、何かしら操作するものがあるとアキトは踏んでいたのだが……、

「何もない……いや、ここに一つだけ他とは材質の違うものがあるな」

壁の中央……調度シートに座ったときの目線の高さにあたる部分に、明らかに周囲の材質とは異なる透明感のある四角い板がはめ込まれている。

アキトはそれに手を触れ、

「モニターか計器の類なのか……他にはなにか……」

探るように手を横へと滑らせて行くと……すぐに右手が今までと違う手触りのものに触れた。

「これは……」

確かめる様に少しだけ強く触れる——と、ピツと小さな機械音が

した。

同時に板が発光。次々に文字が浮かび上がっていく。

『特殊任務』 『コード0131』 『搭乗者登録No.02』
『死亡確認』 『全管制塔応答無し』 『識別コード解除』 『初
期化』

.....

『搭乗者登録No.3?』

『保留』 『登録』

ここに表示は止まる。

今まで黙ってみていたアキトは腕を組み、

「やはりモニターで間違っていなかったみたいだが……特殊任務？
こいつは何かの任務の継続中だったのか……それに使われている
言語が日本語と英語みたいだが——いや、とりあえず保留にし
てシギユンに指示を仰いだほうがいいか」

そう言っつて、アキトは『保留』と書かれた方に指を触れる。

すると画面は徐々に光をなくし、再び中は真っ暗になる。それを
確認してからアキトは一度外に出た。

「どうだった？」

外に出たアキトにシギユンが声をかける。

アキトは俯き、そうだな……と前置きしてから、

「結果から言えば反応があつたが……」

そこで止め、シギユンの反応を見ると――彼女の眉が僅かだがピクリと跳ねる。

「その様子だと以前の調査時にはなかつたようだな」

「ええ、以前調べたときは何も起きなかつた。いったどうやったの？」

「右手側に少し窪んだ部分があるだろ？ あそこに触れたら反応があつた」

「やはりそこが………」

シギユンは言葉を区切ると、搭乗口へと視線を向けた。

「実は以前の調査時でもその場所は徹底的に調べられているの。怪しかつたから。でも何も起きなかつた」

「そうなのか……？」

「ええ、魔力の強い魔動戦士も乗せてみたけど、わたし達には何の反応も示さなかつた。けれどアキトには反応した。それにこのゴウレムの搭乗士も石英が使つた形跡がみられなかつた事を考えると……もしかしたら魔力の無い人間にしか反応しないのかもしれない」

そう言つてシギユンは目元を細めて、アンダー・ゴウレムを見上げた。

沈黙を保つ姿は、まるでシギユンの考えを肯定しているかのようだつた。

そんなシギユンに、アキトはそれと……と横から言葉を付け足すように続ける。

「モニター……こちらで言うと発光石英か、そこに文字が表示されたんだが、使われている言語は俺の知っているものだった」

シギユンは視線を戻し、アキトを見る。

「アキトの……？ ではこれもアキトの時代の文明の物ってこと」

「それは分らない。だがその可能性は高いかもしれない」

「そう……ならそれも含めて調査の見直しね。それと後で詳細な報告書の提出もお願い」

「わかった、明日中には」

その答えにシギユンは満足げに頷いた。

■

……翌日。

アキトは慣れない文字に四苦八苦しながらも、なんとか報告書をまとめ、工房内にあるシギユンの専用個室^{スペース}に訪れていた。

「意外に早かったのね。もう少しかかるかと思った」

部屋に入るなり掛けられた言葉にアキトは苦笑。言葉を返す。

「睡眠時間を削ってまで取り組んだからな……一応目を通してくれ」

そう言って数枚に纏められた書類をシギユンに差し出す。

シギユンはそれを取り、

「……………うん。大丈夫そう。きちんと細かいところまで書き込

まれている。もしかしてこういうの慣れてるの」

簡単に流し読みして、思った事をアキトに尋ねてみる。

アキトはそれに曖昧な笑みを浮かべ、昔な……と短く答えると、視線をシギユンの手元に移し、

「ところで、それは何をやっているんだ」

話題を変えるようにシギユンに質問する。

どうやらあまり触れて欲しいことではないらしい。シギユンはその事を察し、アキトの話題に乗る。

「これはいま取り組んでいる、古くなつた魔動巨兵ゴレムの改修案よ。新規量産するほどの予算はないから、なんとか……ね」

そう言つて苦い顔をする。

シギユンはアキトから受け取つた書類を引き出しに入れ、手元にあつた書類をアキトに渡す。

「俺が見てもいいのか？」

「元々、意見を聞くつもりだったから。一通り目を通したら感想を聞かせてちょうだい」

アキトは頷き、書類に視線を落とす。

書類には精密な絵が描かれ、そこに注釈、それに細かい数字が書き込まれている。

一枚、二枚と捲り……最後のページを読み終わるとアキトは書類の束を、シギユンの座る机の上に置いた。

「どつ?」

シギユンは目線だけで窺うように聞いてくる。

アキトは両腕を前で組み、

「俺は技術屋じゃない。詳しいことは言えないが……扱う側から言わせてもらえば危ういな」

「具体的には……？」

「無理に軽量化しすぎて極端に剛弾性が落ちている。これでは一撃で致命傷になる」

「重量型のゴウレムをなんとか軽量型に出来ないかと思ったのだけど……やはりダメね。この案はわたしも無理があると思ってたの。仮にだけ……アキトならどう考える？」

「そうだな……この機体ゴウレムなら軽量化を諦めて、装甲を増すほうを選ぶだろうな。ただこのままでは腕の可動範囲が低すぎる。余分な装甲は削ったほうがいい」

「なるほど……うん、決めた。ねえアキト、今の考えを具体的にまとめて提出して。それとあなたには今日からわたしの手伝いをしてほしいの」

「手伝い……？ まとめるのは構わないが、俺ではたいして役に立てるとは思えないが」

その言葉にシギユンは横に首を振り、

「そんな事ない。あなたの意見はとても参考になる。それに魔動技術の基礎理論はこの前でだいたい叩き込んだから……知識だけなら結構なものはずよ」

「あれか……」

そう言ってアキトは遠い目をする。その様子にシギユンは苦笑。それに……と続ける。

「元々アキトには助手見習いという扱いで、わたしの元で研究の手伝いをしてもらうつもりだったの。」

もつとも、もう少し魔動力学について知識を深めてからにしておうと思ったのだけど……けど今の意見を聞いて考えが変わったわ。アキトなら今のままでも充分即戦力でいける」

それでも勉強は平行してやってもらうけど、とシギユンは最後に付け加える。

アキトはあからさまに嫌そうな表情を浮かべるが——息を吐き、肩を落とすと、疲れた表情でわかったと頷いた。

「では早速お願い。机はその空いている方を使っていいから」

それだけ言って、シギユンは再び書類に視線を戻し、何かを書き込んで行く。

アキトはそれを横目で見ながら、自分も作業にとりかかるのだった。

序章 3 (後書き)

何故かコピペするとふったルビが全て消える事に今日初めて気付きました!?

確認すると序章一、二でふってあたはずのルビが全て綺麗になくなっている。原因は使ってるフリーウェアのワードのせいっぽい……あとで気が向いたときにでも修正を入れようと思います。

序章 4（前書き）

なんかキリがいいかなと思い、気分的に投稿。

序章 4

西日が夕日になり、街が寝静まる準備を始める頃。
しかしそこだけは例外だった。

「三番から六番装甲研磨、それと古くなって使えそうにない靱帯はあちらへ」

「わかりました。おい！ そっちは三番だ！ 一番は向こう！ あと研磨台空いたら三番から六番の作業開始だ！」

「了解です」

飛び交う怒声と返事。それに作業に伴う様々な音がその場を満たしている。

○番格納庫。通称研究用格納庫と呼ばれるここは軍とは独立した格納庫で、工房専用の格納庫となっている。

収納できるハンガーは三つと少なく規模が小さいながらも、中の設備は軍格納庫よりも行き届いており、機材は充実したものになっている。

そのハンガーだが、現在一つが埋まり、二つが空いている状態だった。

埋まっている中央のハンガー。そこには装甲と靱帯の全てが取り外され、フレームのみとなったゴウレムが幾本ものワイヤーで直立の状態で固定されていた。

ファブニル（５型）それがこの解体前のゴウレムの正式名だ。

ファブニルは現在クリュシユナ国で正式採用されている量産タイプのゴウレムである。

性能は……積載量が多いものの鈍重と、完全にディフェンスタイプのゴウレムであり、型もだいぶ古く、他国に比べればクリシユナ

のゴウレムは数段劣っている。技術差にすると十年から十五年と言われている程だ。逆を言えばクリシユナのゴウレム開発技術はそのぐらいからずっと停滞していたことを意味する。

それはさておき……

格納庫内は入り口から向って『コ』の字型に、前、右、左とハンガー並んでいる。

中は三階建てになっており、それぞれ入り口両端の階段から上り下りが出来るようになっていいる。

一階に人影は多い。皆それぞれ各自割り当てられた作業をしている。

しかし二階には人影はない……今は特にそこで行う作業がないらしい。

けれど三階には人影があった。二人だ。男が一人と女が一人。周りが忙しそうにしているのにも関わらず、その二人だけは落ち着いた様子で、眼下の光景を眺めていた。

「早いな。もう作業に取り掛かっているのか……確か具体的な意見を纏めた書類を出したのは今日の朝だったはずだが？」

黒いフードに外套という典型的な魔動研究者の格好をした男が、色違いの赤い格好をした女性に声をかける。

「やる事はまだまだあるから。アキトが提出してくれた書類が思ったよりも纏まっついていて、直ぐに設計に組み込むことが出来たのも大きいと思う」

そう言って赤い服の女性——シギユンはアキトに身体を向け、柔らかな表情を浮かべる。

アキトは、そうか、と軽く返事、それにシギユンが、あ、でも……と続ける。

「書かれたものでいくつかよく分らないものがあつただけ……」

シギユンは手に持つ書類を何枚か捲くつた所で手を止め、ここ、と一部分を指差す。

「この『ワイヤードフィスト』って何なの？ 手が飛ぶ見たいな事が書いてあるけど？」

アキトは、ああ、と頷くと、苦笑を浮かべた。

「それは記載した通りだ。手を飛ばし相手にダメージを与える。手持ちの武器がなくなったときに使えないかと思ってな」

「ふざけてるの……？」

シギユンが眼を据わらせ、呆れた表情でアキトを見る。
アキトはそれを見て、ふむ、と頷いて真面目な表情で、

「真剣だ」

と短く返す。

沈黙。シギユンは眉を寄せて、アキトを睨む様に凝視する。
アキトは凝視される理由は、と顎先に手を当て考え、

「いや、本当に冗談ではなく、ちゃんとした理由もある」
「……例えば？」

シギユンが疑わしげな瞳を向ける。アキトは咳払い一つ。続きを話し始める。

「まず敵の不意をつけるが一つ。こちらの手持ちの武器がなくなり、相手が油断しているときに手が飛んでくれば少なからず動揺するだろう?」

「それは……そうかも」

なんとも納得がいかない微妙な表情は頷き、シギユンは、他には、と続きを促す。

「あとはこちらが本題だが。この国の地形は谷や崖などの高低差が激しい地形が多い」

「ええ、そうね」

「その場合この重量級のゴウレムでは急な斜面などを登ることは出来ない。もしも相手に上を取られる形になったら一方的にやられる場合もあるかもしれない」

その言葉にシギユンは表情を改め、真剣な顔つきでアキトを見ると質問する。

「でも、それは上をとらせないようにするか、そういう地形に入り込まない様にすればいいんじゃないの?」

アキトはゆっくり首を横に振る。

「いや、戦場に絶対はない。そういう状況で戦わなければならない時もあるし、そうせざる得ないときもあるかもしれない。だいいち国土の殆どを荒野と渓谷が占めるこの国では、それは高い確率で起こりえる」

「……わかった。——けど、それとこの手が飛ぶ事にどういう関係があるの？」

「ああ、それでだ——この本体とワイヤーで繋がった腕を飛ばし、崖などに捕まらせた後は、ワイヤーを巻き上げ、本体をよじ登らせる。直角の傾斜は無理でも、これならかなりの傾斜でも昇る事が出来るはずだ」

アキトの話に、シギユンは俯き、しばしの間黙考したあと、

「……………それなら可能かも」

と、感心したように頷く。

その答えにアキトはほつと肩を撫で下ろすが、直ぐに、だが、と前置きし続ける。

「問題点はいくつもある。耐久力と飛距離、それに腕部重量の増加」

「……それに魔力量で扱えるものと扱えない者が出てくる。まず間違いないプレスガンの扱えない下位魔動戦士には無理でしょうね」

「そこらは魔力がない俺には、よくわからない感覚だから……シギユンに任せる」

「そうね……少し考えてみる。だけど、どちらにしろ今回の改修案には使えそうにないわね。これだけの物を造るとなると、フレーム強度も見直して、一から設計しなおさないとイケないし」

シギユンは手元の書類に目を落とし、軽快に筆を滑らせていく——が、それも途中で止まり、でも……と呟く。

「これが一段落したら、新型ゴウレムの開発にも着手するつもりだから、その時までには具体的な解決策が出てたら使ってみるのもありね。それにもう一つ、『ピッドブロックシステム』って書かれたこ

の案。これはかなりいい発想だと思う」

シギユンはどこだっけ、と書類を捲くりながら言葉を続ける。

「あ、これね。搭乗者の乗る胴体部以外を換装式にして、破損した部位を丸ごと換装する。確かにこれなら緊急時の整備効率が大幅に上がる事になる。人手も減らせるし、費用の面も同一規格の物を製造するから大幅に減らせる事になる。よく考え込まれているけど、もしかしてアキトの時代で使われていた技術なの？」

顔を上げ、覗き込んでくるシギユンに、アキトは頷き、苦笑を浮かべる。

「そうだな……形は少し違うが、使われていた。本来は四肢の換装だけではなく、搭乗者の乗るピッド周り以外を、それぞれコンセプトの全く違う機体に換装させ、どんな場面でも戦えるよう、汎用性を高めるためのものなんだがな。流石にそれはな……」

曖昧に言葉尻を濁し、アキトはシギユンに視線を送る。シギユンとアキトの視線が合い……彼女は、確かに、と呟くと苦い表情を浮かべた。

「丸ごととなると場所を取るし、ハンガーに余裕がそれほどあるわけでもない現状では無理ね。それにこのコンセプト最大限に活かすなら、それこそ要塞が移動するという状況でもない限り無理な話だと思う」

「ああ、そのとおりだ。これは母艦——と言っても分からないか。多数のゴウレムを積載運搬できる能力と整備が同時に出来る、そういう物があつての運用を前提に考えられているからな。それが用意できない時点でこの考えはあまり意味を成さないだろう」

もつとも、それ以前にこちらの技術では再現は難しいだろうが、とアキトは最後に付け加えて、再び作業を行っている眼下に視線を向けた。

下では作業はピークに入り、皆忙しそうに動き回っている。誰一人として眠気や疲れた気配を見せるものなどいない。シギユンもそちらに視線を向け、

「やっぱり古代の文明は凄いのね。こちらでは不可能だと思える事を実現することが出来るだけの技術がある。まだまだこれらはその一端で、きつともつと凄い技術があるのでしょうか。……できるのなら一度……」

そこで言葉を止め、シギユンは黙り込んでしまう。

アキトには彼女が何を言おうとしたのか……気づいていた。けれど何も答えない。

その願いは叶わないと分かっていたから。

きつと叶うことはない願いだから。

だからアキトは何も言わず、ただ沈黙でもって答えた。

——この眼で見てみたい。

もしこの願いが叶うとしたらそれは……

偶然に偶然が重なり合った結果の……きつと奇跡と呼べるものなのかもしれない。

アキトはちらりと横目でシギユンを見る。彼女の顔は一見、無表

情に見える。

けれど、その横顔が楽しそうである事がわかる程度には……彼女とは親しくなれたと、短い付き合いながらに、アキトは思う。

しかし……眼下の光景を映す、その瞳の奥。最後の言葉を呟いたときに垣間見せた、悲しみにも似た寂しげな瞳。それがアキトの脳裏に鮮烈に焼きついた。

（以前も何処かで……）

同時に浮かんだ誰かの横顔と重なり——アキト無意識に右手で左胸を押さえた。

■

日は中天を指し、きらざらとした太陽が荒れた大地に容赦なく日差しを注ぐ。

王都ビノンテン北方外門より北に五百メートル。

見渡すか限り何もない荒野の中心で二台の色の異なる魔動巨兵ゴレムが対峙していた。深緑と青。二台とも重厚で丸みのあるボディと、一見同じ形に見えるが、微細な部分で違う。深緑に比べて青のゴウレムのほうが腕部が細く、体幹に厚みがある。

二台の間の距離は二十メートル（十七メートル）。手には同じ両刃の片手剣を持ち、両者とも構えもせず自然体を維持している。

南で一瞬、光が瞬く。外門の方だ。それと同時に二台のゴウレムに動きがあった。

動き出したのは緑のゴウレム。剣を両手で構え、相手に向かって一直線に走り出す。

青のゴウレムは剣を構えるだけで動かない。

二十メートルあると言っても、全長は十メートルもあるゴウレムにと

って、ないに等しい距離。

二人の距離は一瞬にして縮まる。

接近。そして緑のゴウレムが剣を縦に振り降ろす。青のゴウレム剣で受け、弾き、肩からぶつかる。両者の間合いが離れた。今度は動き出したのは青いゴウレムだ。

剣を横に薙ぐように振る。巨大な質量を持った剣の刃先が相手の体幹に迫る。

それをなんとか態勢を立て直した緑のゴウレムが辛うじて剣で弾く。

ガン！ と一際甲高い音が荒野に響き渡る。

弾かれた反動で青の態勢が後ろに流れる。緑のゴウレムはすかさず剣を態勢の崩れた相手に叩き込む。

決まる。そう思った。しかし剣は空を切る。

何故？ ゴウレムの搭乗士は疑問を浮かべる。その直後、背後から衝撃が駆け抜ける。

剣を振った後の不安定な態勢。それに激しい背後からの衝撃に、こらえる事が出来ずに緑のゴウレムは前のめりに倒れる。

気がつけば、青のゴウレムが倒れた緑のゴウレムの背後から背中に剣を突きつけていた。

『そこまで！！』

何処からともなく声が響く。くぐもった声。拡声器を使用した際に特徴的に見られる声だ。

声の出所はだいぶ遠い。二台から五十メートル以上離れた場所に三輪のバイクが見える。どうやら声はそこからかけられたらしい。

青のゴウレムは構えた剣を降ろすと、倒れたゴウレムから離れた。

その光景を遠くから見ると、複数の影があった。

北方外門の見晴らし台。そこにローブのような外套を羽織った集団がいた。工房の人間だ。

色は黒と赤。赤い色は一人しかいない。シギユンだ。

口髭が豊かな初老の男性がシギユンに声を掛ける。

「これは凄いですな。同じファブニルとは思えません。運動性能に安定性、どれも従来のものを遥かに上回っております。特に格闘能力の向上は著しいですな」

老人のやや興奮した言葉に、シギユンは落ち着いた様子でええ、と頷く。

「確かに課題であつた格闘能力の向上、それに腕部の取り回しは大幅に改善されています。ですが、まだ問題点も多いです。それに耐久力も数値通りに出てるか確認しなければなりません。もどつたら検証をお願いします」

荒野に向けていた視線を戻し、シギユンは老人を見る。老人は頭（カブ）を垂れた。

「わかりました。他のものにもその様に指示を。シギユン様はこれからどうなされますか？」

その言葉に、シギユンは手に持つ資料に視線を落とし、

「もう少し、今の結果について一人で検討したいので、後でそちらに向います」

「そうですか……、では我々は先に戻り、作業を進めております」

老人は他の工房の人間に声を掛けると、促し、シギユンに背中を向けた。

先程まで工房の人間の興奮したざわめき、それに今の結果を話し合う声で賑やかだったと言うのに、少しの後に、嘘の様に静かになる。

静寂。唯一、聞こえるのは荒野から吹く乾いた風の音。けれど静寂を乱すのは、風だけとは限らなかった。

「結果は上々のようだな」

アキトだ。アキトが背後からシギユンに声を掛ける。

皆が戻ったと思ったが、アキトだけは最初から最後までそこに居た。

アキトが歩き出す。その足音を聞きながらシギユンは、

「そうね。今の結果だけ見れば、今回の事は一応の成功を納めたと言ってもいいと思う」

でも……、と続け、シギユンは近づくアキトに振り返る。

「これだけで満足してはダメね。クリシュナのゴウレム技術は他国に比べ遥かに遅れている。噂では最近開発されたという、アテネスの新型軽量ゴウレムは十メートル以上も跳ぶ事が出来ると聞くし……、もしも戦争になれば今のクリシュナじゃ、きつとひとたまりもない。ここで気を抜くことは、とてもじゃないけど……ね」

そう言っ、シギユンは苦笑を浮かべるように軽く微笑んだ。けれどその笑みに力は無い。

当然だ。ここ三日ずっと徹夜だったのだ。疲れていないわけがない。

アキトは肩をすくめると吐息。少し呆れた視線を彼女に向け、

「頑張るのはいい。追い込むのも時には必要だろう。それを俺も止めはしない。けど——思いつめるのは程々にしたほうがいい。これは忠告だ」

「……………それは経験から？」

「そんなところだ」

曖昧に答え。アキトは苦い笑みを浮かべる。シギユンはしばしの間、その顔を見つめ、

「そう……、ありがと。やっぱり少しだけ休みを貰う事にする」

「そうか、なら報告は俺がしておく」

アキトは踵を返し、シギユンに背を向ける。
遠ざかる背中にシギユンは静かに声をかけた。

「アキト」

呼び止められ、アキトの足が止まる。そして首だけで振り返る——
それよりも前に、

「ありがと」

シギユンの穏やかな声が、アキトの振り返る動きを止めさせた。
返事は無い。

アキトは再び歩みを再開し、

「気にするな」

背中を向けたまま、短く返すと、その場をあとにした。

シギユンはその言葉に、薄く笑みを浮かべると――澄みわたる遠く
の空を見上げた。

序章 4（後書き）

ちよつとどこで序章を区切るか迷っている今日このごろ。

まあ、それはいいとして……

用語説明とかいります？

結構専門用語出てくるから、ブレブレ知識がない人には分り難かったりするのだろうか？ 一応わたし的には原作知識無しでも読めるように書いているつもりですが…… まだまだ至らない所がある訳でそれ以前にどれくらいの人が原作知識無しで呼んでるのかも分らないし…… そこらへんは意見が出たら考えてみます。

と、久しぶりに少し長めの後書きを書きましたが…… ここからはお知らせ。

一応次回の更新は七月を予定しています。更新も月一に戻すと思います。ここ最近の更新はちよつと時間が空いたたので特別です。では、後書きまで最後まで読んでくださって方に感謝しつつ、この辺で。

序章 5

シギユンの体調を気遣って、予定していた会議の翌日延期。

その旨を会議に関わっている関係者に伝えると、アキトは一人、研究用格納庫まで足を運んでいた。

入り口から除く中は誰も見当たらない。恐らく作業が終わり、整備の人間も引き上げたのだろう。

中央のハンガーには、直立の姿勢で固定された青いゴウレムが、アキトを見据えている。

アキトは中に入ると、改めてゴウレムを見上げた。

ファブニル（6型）。正式に採用が決まれば、その名前がつく予定のゴウレム。

シギユンが手がけ、アキトが手伝った。

今まで乗る側だった自分が、初めて製作側に回り、製作に携わった。なんとも不思議な感覚だ。

「随分と無茶させてたんだな」

今だからわかる技術屋の苦勞。エステバリス、それに続くブラックサレナ。共に何度も無茶をさせ、壊し、その度には整備の人間からは怒られていた。その気持も今なら共感できる。

自然と昔を思い出しククツと笑みがこぼれる。

「そついえばウリバタケさんも、いつも愚痴と文句を言いながらも整備してくれてたっけ」

はじけた性格で凄く問題の多い人だったけれど、それでも技術屋として、人一倍の誇りを持っている。そんな人だった。今会ったなら、あの人に対しての見方が変わるのかもしれない……そんな考え

過ぎり、ふと思う。

——いつから自分はこんなにも過去を笑えいながら思い出せるようになったのか、

と……。

少なくとも少し前までは、過去は思い出したくないものであり、思い出すのは苦痛だった。

過去が楽しく、幸せであればあるほど……それは辛く、苦しい、その筈だった。

なのに——

「変わった……いや変えられたのか」

アキトは右手を左胸に持つて行く。

締め付けられる痛みはある。けれど昔ほどじゃない。アキトは上を見上げ、

「そういえば、ここで目覚めてそろそろ一ヶ月が経つのか」

日にちにすると約三十日。長いようで、けれどあっという間だった気がする。

「忙しさで、思い出す暇もなかったな」

ここ最近の事を振り返り苦笑。本当に密度の濃く、目まぐるしい毎日だった、とアキトは少し遠い目をした。

ただ——やはり過去を思い出すと気がかりな事もある。

「ラピス……」

その名をつぶやき、アキトの顔が悲しげに歪む。気持を表すよう

に、胸に当てていた手がギュツと閉じられる。

ラピス・ラズリ。

過去、アキトが助け、そして利用した少女。

少女はアキトに依存していた。そしてアキトはそれを結果的に利用した——復讐の為に。

目覚める直前の記憶が抜け落ちているからハッキリとしたことはわからない。けれど、もしも向こうで自分が突然失踪した扱いになっているとしたら……残された少女は大丈夫なのだろうか。そんな不安が過ぎる。

戻るべきか……？ 一瞬浮かぶ思考——しかしアキトは首を振り否定した。

「それは出来ない……。指名手配されている俺が……、そんな俺が戻っても周りに迷惑になるだけだ」

無意識に噛み締めた奥歯から音が鳴る。立ち尽くすこと数秒……アキトは大きく息を吸い、吐きだすと脱力。そして踵を中心に一八〇度。この場を去ろうと歩き出すが、

「おいおまえ！ ここで何をしている！」

突如かけられた声に足を止めた。女の声だ。

声は前方、格納庫入り口。そこに三人組の男女がいた。女が一人に男が二人。全員が襟立ての黒のトレンチコートを羽織っている。

左の胸元には階級章。

それが何を意味するのか——考えるまでもない。軍人だ。それもこのクリシュナ国では黒のトレンチコートの軍服に袖を通せるのは魔動戦士だけと決まっている。

アキトはそちらを眺め、また面倒なものに絡まれた、と内心で溜息をつく。

「聞いているのか！ 質問に答えろ！」

「ああ、聞こえている」

アキトは応え、声の主――中央に立つ、長い黒髪を後ろで一つに結わいた、女へと視線を向ける。

「お前はこんな所で一人で何をしている？ ここはシギユン様の研究用ハンガーだぞ」

そう言つて女は不審者でも見るような目つきで、アキトを睨みつけ、威圧する。

アキトは、ん？ と何故こんなに強く警戒されるのか……と疑問に思い、すぐに答えにいきつくと、ああ、と納得した。

確かに……誰もいない格納庫、それも研究を目的においた特別な場所に一人で居たら、スパイか何かと間違われてもおかしくはない。アキトは、ふむ、と頷き、

「何を誤解しているかは知らないが、俺はこの関係者だ。怪しいものじゃない。何ならそこにある物についても詳しく説明すること出来るが……どうする？」

そう言つてアキトは、顔は正面を向けたまま目線だけで背後にあるゴウレムへと促す。

女は一度ゴウレムに目をやり、再びアキトに視線を戻すと、いいだろう、と言い、警戒を緩めた。

「その言葉信じる。だが、今度不審な所を見かけたら容赦はしない。いいな」

それだけ言い放つと女は踵を返して、さつさと格納庫から立ち去って行く。後の二人も続くが、途中、黒髪の男の方だけは振り返ると、申し訳なさそうな顔をして軽く片手を挙げ、すまねえ、と声には出さず、唇の動きだけで謝罪を口にする、慌てて二人の背中を追いかけていった。

アキトはふう……、と疲れた息を吐き、

「……なんだったんだ」

その言葉を残して格納庫をあとにした。

■

格納庫を後にして直ぐ……

「なあ、なんであんなにつつかかったんだ？」

三人の中で短い黒髪に褐色の肌の男、ナイルが先頭を歩く女性、ナルヴィに尋ねる。ちなみにアキトに謝ったのも彼だ。

ナルヴィは立ち止まると振り返り、眉を寄せた不機嫌な声で答えた。

「わからない。ただ、なんとなく危険だと思った」
「危険……？」

その言葉に、意味がわからない、とナイルは首を傾げ、

「どこが危険なんだ？ 格好も技師のもんだし、特別体格ガタイが良い訳でもない。そんな危なそうな奴には見えなかったけどね」

「……………確かに。だが、だからこそモヤモヤするといつか……………」

上手い言葉が見つからないのか、ナルヴィは俯き、腕を組むと黙りこんでしまう。——と、

「俺もナルヴィの意見に賛成だ。彼は危険な気がする」

今まで黙り込んでいた、背の高い金髪白人の男、ロギンが横から口を挟む。

ナイルは、ロギンのだんなまで？ とロギンを見やる。

「ああ。彼の立ち姿はとても技師のものとは思えない。重心のぶれないし、かりとしたものだった。軍籍の経験でもない限り一般人であればありえない」

うーん、とナイルも腕を組み、思い出すように考え、

「そうかあ？ だんなの考え過ぎじゃないか？」

「……………いや、ロギン殿の言うとおりだ。確かに普通じゃない」

ナイルの言葉をナルヴィが否定する。彼女は組んでいた腕を解くと、格納庫があつた方角に顔を向け、

「どちらにしろ警戒するに越したことはないな。もしも今度、変な動きを見せたら……………」

そこで言葉を止め、好戦的な笑みを浮かべ、口角を吊り上げる。その様子ようすにナイルは、はあ……………と呆れた息を吐き、ロギンは眉

を落として困った表情を浮かべた。

ナルヴィは歩みを再開。未だ立ち止まったままの二人に向けて、

「いくぞ、ナイル兄、ロギン殿」

そう声を掛けると、先を歩いて行く。二人はしばらく、その背中を眺めていたが――やれやれ、といった感じでナイルは頭を掻くと、ロギンと一度視線を合わせ、二人は頷くと慌てて彼女の背中を追いかけた。

間章

蒼穹。その言葉が合うように空は青く鮮やかな色に澄みわたり、雲ひとつない。見えるのはどこまでも突き抜けるような青。

けどその光景に一つの影が差す。鳥だ。大きな翼を広げ、滑空しながら螺旋状に空を翔けまわっている。

そんな光景を、窓枠に頬杖をつき、ぼんやりと眺める青年がいた。艶のある黒髪に褐色の肌。緩められた瞳からは気力というものがない。彼——ホズル・クリシュナ九世は何をするでもなく、空を眺めていた。

彼が座るのは窓際の質素な木の椅子。前には一人用の、同じく木製の机が置かれている。

とても王が座ると思えない、何の装飾も、飾り気もない、シンブルな椅子と机。

だが部屋にはもう一つ椅子がある。部屋の中央奥。一段、高い位置に、一目で特別だとわかる豪華な椅子が置かれている。玉座だ。

しかしその椅子が使われる事は滅多にない。

理由は単純。ホズルがあまり使いたがらないからだ。

彼は好んで、この窓際の椅子に座り、もっぱら玉座は部屋の飾りの一部と化している。

しばらく静かでゆったりとした時間が流れる。窓から吹く微かな風の音。遠くで時折聞こえる鳥の鳴き声。

穏やかさ——そのものだった。

しかし、

「陛下!!」

突如舞い込んだ騒がしい^{ちん}闖入者により、穏やかな空気は一瞬で崩れ去る。

ホズルは眉を寄せ、ふう、と短く吐息。寄った眉を右手で揉み解しながら、空気を壊した張本人へと顔を向けた。

「なんだ騒々しい」

声にも若干の険を混ぜて声を掛けるが――かけられた本人である老人は、気にした様子もなく、ホズルの前までくると頭を下げた。

「申し訳ありません。それよりもオーランドから書状が届きましたゆえ、急いでお持ちいたしました」

「オーランドから？」

ホズルが顔を顰めると、老人は懷から手紙を出す。

その手紙の封には確かに蠟印でオーランドの刻印が押されていた。オーランド――それはクルゾン大陸の東に存在する宗教大国。国土だけなら大陸で二番目誇り、クリシュナとは国土を隣接する。

貿易でもクリシュナは何かとお世話になっており、その昔クリシュナが独立戦争を起こした際も、手を借りたりと、何かと縁のある国である。

関係も、これまでに目だった争いなどなく、いたって国交は有効と言える。

その国からの書状。無下には出来ない。

突然の書状に訝しみながらもホズルは手紙の封を切った。

取り出し、目を通す。

しばらく経ち……ホズルは手紙を折りたたむと、便箋に戻した。

「なんと……？」

老人が、表情が険しくなったホズルを心配して声をかける。ホズルはああ、と頷き、

「こんどの合同演習について書かれていた」

手紙を机の上に置く。老人はその手紙を目線だけで追いながら、はて、と呟いた。

「もうそんな時期でしたかな？　確か去年行っただけだと思いましたが、私の記憶違いで？」

「いや、間違っていない。確かに去年行われた」

「としますと……これは何かの手違いでは？　演習は一度行われると一年から二年は間を空けるのが恒例ですし」

それにホズルは首を横に振り、それはない、と断言する。

「国印まで押されているのだ。国の面子もある。手違いで済まされる事ではない。それはお前が一番わっている筈だろロレン」

ロレン、そう呼ばれた老人は、ふむ、頷き、柔和な表情を浮かべると、豊かな口髭に手を持っていき、言ってみただけです、と言う。その言葉にホズルは苦笑。それで、と続ける。

「お前はどうか考える、この演習を？」

「何かの意図があるのは確かでしょうな」

「確かにそうだな。だがどんな意図があるかは検討がつかん。何か心当たりあるか？」

「いえ、私にも……ただ最近、どうも議会の方で好戦派が勢いづいている、というのは小耳に挟みましたな」

その話にホズルは顔を顰めると黙り込む。しばしの間が空き、

「どうもキナ臭くなってきたな。とりあえず無駄だろうが、オーラ
ンドには抗議文を。それと平行して裏を探ってくれ。期間は演習が
行われるまでの二ヶ月だ」

「そうですね……それが最善でしょう。わかりました、直ぐに行動
いたします」

「頼む」

ロレンはその言葉を聞き終えると、踵を返し、足早に部屋を出て
行く。

ホズルはその背中を見送りながら、

「何もない方がいいが」

呟くと、再び、窓の外へと視線を向ける。

あんなに青かった空は、陰りを見せ始め、夕焼けになりつつある。
西日から夕日に変わる——移り行くその空を見ながら、ホズルは
人知れず疲れた息を吐いた。

間章（後書き）

次回更新は七月と言っておきながら——更新！！
やはり序章をあそこで終わらせる事にしたので、急遽、間章を入れる事にしました。

七月からは新章でお送りしたいと思います。

間章 2（前書き）

後書き少し遊びに走りました。

むしろ遊びだから後書きに入っただのか……。

シリアスな世界だけど、中にはこんな人達いてもいいよね。

場合によっては後書き消します。

間章 2

■

「この前の試験評価演習、軍の評判かなりよかったみたい。正式にあの改修案が通る事になりそうよ」

最初の性能評価試験から数日後のとある日の午後。

アキトは借りてた本を返すべく工房内のシギユンの部屋を訪れると、彼女はそう話を切り出してきた。

「それは朗報だな。これでファブニルの改修計画もひと段落か」

「何を言っているの？ これからよ」

そう言ってシギユンは呆れた眼差しでアキトを見る。

「この王都ビノンテンにあるゴウレムだけでも約八十台。国境警備に配備されているものや、要塞のも含わせれば全部で二百台弱になるわ。それら全て改修しなければならいんだから……まあ、今より忙しくなることは絶対ね」

「……気の遠くなる話だな」

アキトは遠い目を見ると、僅かに口元を引き攣らせる。

これから二百台以上のゴウレム改修する……いったいどれ程の労力が手間がかかることか。

全て手作業による作業を考えると、かかる時間も相当なものになる。

「そうね。……工房の人間を総動員しても約二ヶ月はかかる見通しよ。さらには国境警備についている部隊の入れ替えなどもあるから、軍とも相談して効率よく作業すすめないと」

「二ヶ月か……想像以上に厳しい期間になりそうだな。魔力がない俺では作業は手伝えないが、出来る事があれば言ってくれ。可能な範囲でなら協力する」

「それならよかった。ちょうどアキトにお願いしたい事があったの」

そう言つて含みのある微笑みを浮かべるシギユン。

出合った当初に比べ、本当に色んな表情を見せてくれるようになったとアキト思うが……その反面、自分に対して遠慮がなくなり、こんな子悪魔めいた笑みまで見せる。

はやまったか、とアキトは自分の発言に後悔を覚えつつシギユンに怪訝な眼差しを送り、

「出来る範囲でな」

念を押すように再度同じ言葉を口にする。

シギユンは苦笑を漏らし頷くと、心配しないで、と言ひ言葉を繋げる。

「そんなに無理難題を頼むつもりはないから。ただちょっとお使いに行つてきてもらいたいの」

「おつかい？」

「そう。ちよつとミゾラム要塞まで」

■

気が遠くなるほどの年数、激しい陽射しを浴びただろうと思える褐色の荒野。

遠くに見える景色は小山と見間違える多くの絶壁群。

アキトは砂塵を巻き上げる四輪車の上で、僅かに服の裾間から出る剥き出し部分の自信の肌――それを容赦なくじりじりと焼く頭上の太陽に手をかざし恨めしく睨みつけた。

「暑いのは苦手ですか？」

横にいる男が聞いてくる。年の頃はアキトと変わらない、もしくは少し若いくらいだろう。柔らかそうな黒髪に細い糸目、穏やかな物腰の青年はこちらに気遣うような視線を向けている。

右手はこの車の操縦桿である、伝達石英に添えられている。添えられた石英には赤い光が灯っている。

アキトは黒い外套のフードを深く被りなおすと、そうだな、と答え、座席に身を沈めた。

青年、イアスは糸目を更に細くして、口元に僅かな微笑を浮かべた。

「思っていたより話しやすい人で安心しました。てつきりもつと怖い方なのかと」

「なんだそれは……？」

振られた話題に、アキトはフードの隙間から目線だけでイアスを見る。

「いえ、あまりシギユン様以外のかたと話されてるのを見たことはありませんし、なんだか近寄り難い雰囲気があるので、工房の職員のあいだでは、もっぱらそんな風に言われてるんですよ」

「……………」

「でも実際はもつと接しやすい人で安心しました。ちょっと不安だったので。それに今回のファブニル改修の大まかな発案はアキトさ

んが出されたとか……同じ工房の技師として尊敬します」

「俺は意見を出したただけだ。意見を具体的に纏めたのはシギユン……様、だからな。俺は何もしていない」

「あー、そんな取り繕ったように様付けしないでいいですよ」

そう言うといアスはおかしそうに苦笑を浮かべ、

「みんなアキトさんがシギユン様を呼び捨てにしているのは知っていますし。随分と仲がよろしいんですね。なんでも同郷のよしみだから」

言われ、そういえば工房に入るにあたってそんな設定があったなと、アキトは半分忘れかけていた事を思い出し、まあ……な、と曖昧に答えると、ボロが出て困るので話題を変える事にした。

「そういえばミゾラム要塞まで、あとどれくらいかかるんだ？ もうかれこれ二日走ってるわけだが」

多少強引な変え方だったにも関わらずイアスは特に何かを言う事もなく、思案の表情を浮かべると少しの間を置いて、

「そうですね……あと二日という所でしょうか。西部の国境にあるのでどうしてもそのくらいはかかりますね。今日は途中に村があるので野宿しないですみそうなのはありがたいですけど」

「二日か……すまないな」

「え？ 何がですか」

突然の謝罪にイアスは軽い驚きから糸目を僅かに見開くと、顔ごとアキトの方へと向ける。

「俺には魔力がないからな。ずっと運転を任せてしまつて悪いと思つてな」

「あー、そのことですか。気にしないでください。最初”魔力無者”だと聞かされたときは驚きましたけど、こればかりはどうしようもないですからね。それに百万人に一人の確立と言われている人と出会えたのは、ある意味貴重な経験だと思いますし」

そう言つて糸目を細めると、イアスは改めて伝達石英に魔力を込めた。石英の赤みが増す。

四輪者はその意思に応えるように、少しだけ速さを上げた。

「それにこうやつてテンカワさんと話す機会を得られたのも良かったと思います。そうでなければ恐らくずっと誤解したままでしたでしょうし」

「そうだな……俺もこうして話すことが出来たてよかったと思う」
「それは光栄です——っと、そろそろ中継地点ですね。そのオアシスで水を補給しますんでテンカワさんは待っていてください」

少し遠くに捉えた小さな緑。褐色の荒野の中にあつて目立つその色に自然と視線を惹きつけられる。アキトは目を凝らして確認すると、

「いや、それは俺がやる。お前は休んでいてくれ。これぐらいはさせてくれ」

「そうですか……ではお願いします」

イアスは軽く微笑んだ。

■

ミゾラム要塞は隣国アッサムとの国境沿いにある、西部国境最大の守りである。

周囲は幾筋もの峡谷に囲まれ、ゴウレム数台分ほどの起伏が縦横に刻まれており、接近する敵軍の視界を奪い侵入路を限定する。網の目のように張り巡らされた天然の塹壕だ。

要塞北方には深い峡谷が大陸北部まで延びており、必ず進軍する上でこの要塞を避けて通ることはできないようになっている。

航空兵器がなく陸戦兵器が主流のこの世界において、この要塞が持つ戦略的意味合いと重要性はアキトが考えるより遥かに大きい。

アキトはそびえる要塞の門扉をくぐりながら、まるで城みたいだ、と思った。

要塞を囲う環状防壁は高く、数十メートルはある。厚さもかなりありとても頑丈そうだ。要塞の中心には防壁よりも遥かに高い突き出た建物があり、恐らくそこが司令塔の役割をしていると思われる。

そこまでを一目見ただけで分析したアキトは、予想以上に攻め難い、というのがこの要塞に対して抱いた第一印象だった。

要塞に入りまず通されたのは司令室だった。要塞の中央、一番高い所にある天守のような場所。そこには二人の人間が待っていた。

一人は眼鏡をかけた士官と思しき、まだ若い黒髪の男。そして壮年と呼ぶには大いに後退した頭髪と老人とは言えない精力の漲りがあり、まっつてこの男の年齢を分らなくしている。

イアスが壮年の男に向って声を張り上げる。

「ゴウレム改修の監督としてイアス、アキト、両名！ ただいま着任いたしました！」

「やあ、どうも。話は聞いてるよ。この西部国境守備軍の司令官を務めるサガレスだ。よろしく」

司令官だと名乗ったサガレスは飄々とした態度でイアスに挨拶を

返すが、垣間見せた鋭い眼光が、この男が見かけ通りの人間でないことを証明している。

アキトはイアスから一步下がった位置で、様子を見守りながら油断ならないな……と警戒心を強めた。

「とりあえず今日は長旅で疲れただろうから休んでくれ。部屋は用意する。それで明日から作業開始ということになるが……期待できるものなのかい？」

訝しむというよりも、半信半疑な目でサガレスはイアスを見る。それに対してイアスは自信を持って答えた。

「はい、きつとご満足いただけるものだと思います。詳細は後ほど資料をお持ちいたしますので、そちらの方を御覧ください」

「そうかい。なら楽しみにしておこうかなあ。それと必要な資材は一応揃っているけど、足りないものがあれば早めに言ってね。なんて言っただってここは辺境だから、届くまでに時間がかかるからね」

「はッ、お心遣い感謝します」

「うん、いい返事だ。それじゃあ、よろしく」

その言葉にイアスが頭を下げ、遅れてアキトも頭を下げると二人は揃って部屋を退室した。

「シギン様もなかなかおもしろい人を寄こしたもんだ」

「は？」

二人が居なくなつてから数秒——サガレスの独り言を拾った男が疑問の声を上げる。サガレスは呆れた吐息を一つ。出来の悪い生徒を見るような眼差しを向け、

「君はもう少し目を養ったほうがいい。知識だけじゃ士官は務まらないよ」

「それはどういう……」

「そのまま意味さ。二人を見て何か気付かなかったかい？」

その質問に男は沈黙。眉根を寄せ考えるが——きつちり五秒後、サガレスが時間が切れとばかりに声をかける。

「じゃあ、これは課題だ。次の機会にでも聞かせてよ。でもそうだね……すこしだけヒントを上げよう。正確には二人じゃない。一人だ」

「一人？」

「そう一人だ。——さあ、この話は以上だ。俺たちは俺たちの仕事をしよう。改修が終わるまでざっと一ヶ月。機会はいくらでもあるしね」

意味深な言葉を残すと、サガレスは目に鋭い光を宿してそっと窓から見える褐色の大地へと視線を向けた。

■

夜が明ける。

東の空、峡谷の隙間から太陽が覗き、ミゾラム要塞を徐々に照らして行く。

朝靄の静けさはここも変わらない。穏やかで澄んだ空気が満ちている。

環状防壁の上、アキトは日の出に照らされていく峡谷をぼんやりと眺めていた。

ここにいる理由は特にならない。ただ目が覚めたから——自然と見晴らしのいいここへと足を運んでいた。

緑の少ない乾燥した褐色の大地。その光景はアキトに故郷の姿を思い返させる。

火星——アキトが生まれ、育った場所。二十四年という人生において大半の時間を過ごした場所であるけれど、アキトは火星にあまり良い思い入れはない。

両親の死、戦争、そして復讐の結末。アキトにとって火星は始まりであり、馴染み深いものであり、思い出深いものであり、そして終わりの場所でもあった。

ふう……、

アキトは石床を強く踏みしめ、長く息を吐いた。思い返すと自分の人生は碌なもんじゃない。アキトはつくづくそう思う。

ふと、視線を東の空に向ける。

気がつけば日の出は既に日の出ではなく、朝日に変わっている。

薄っすらとした朝闇はもうどこにもない。アキトの足元にも濃い陰影を落としていた。

アキトはその影を踏みしめるように壁に背を預けると、歩哨の姿が目に入る。

視界に入った人数は四人。今は一箇所に固まって何かを話している。歩哨は通常二人一組で行う事を考えると、どうやら今が交代の時間のようだ。

それはこの要塞の目覚めが近い事を意味する。

アキトはイアスが部屋に訪れる前に戻る事を決める。

今日は作業一日目。きつと忙しい日になる。そんな確信をもってアキトは音も無く、その場をそつと後にした……

歩哨は誰一人としてアキトがそこに居た事実気付いていなかった。

ミゾラム要塞格納庫横の会議室。二十人は入っても少し余裕がある部屋に長机が『コ』の字型に並べられ、その机を囲うようにたくさん椅子が置かれている。

アキトは部屋に入るなり椅子の一つに深く腰掛けると吐息。その表情は疲れの滲むものだった。

「お疲れみたいですなアキトさん」

先に居たイアスがアキトに声をかける。

だがそのイアスの声もいつものような張りがない。有体に言えば疲れている。

二人は視線を合わすと、自然と苦笑を浮かべ、

「まあな。人に指示を出すのがこれほど大変だとは思わなかった。

これなら身体を動かしてたほうが楽だな」

「ははは、アキトさんらしいですね。早朝にここの整備員たちに今回の改修に対する概要とおおまかな説明。それが終わったと思ったら、さっそく一台を仕上げる事になりましたからね。指揮をとるのも楽じゃないですよ。もう声が枯れそうですし」

「だが昼までに終わったのは僥倖だな。思いの他ここの技師が優秀でよかった」

「それは皆さん熱意に溢れてましたからね。よっぱど暇してたんじゃないんでしょうか。説明するときも怖いくらいに目を輝かせて聞き入ってましたからね」

新しいおもちゃを与えられて悦ぶ子供みたいでしたから……イアスはそう言っ、少し困った表情を浮かべた。

アキトも思い出し、少し眉尻を下げると同様の表情を浮かべる。

その時だった、

「班長！ 休憩終わりました！ 皆も待ってますんで早く続きやりましょう！」

駆け込んで来たのは、アキト達よりも年若い、体格のがつちりとした青年だった。瞳を輝かせ、今か今かと、急かす様に二人を見ている。

アキトとイアスは顔を見合わせ、苦笑を浮かべて肩をすくめると立ち上がり、青年に応えたのはイアスだった。

「わかりました。すぐに行きます。ですからあと五分待ってください」

「はい！ わりました！ 先に行つて皆に伝えてきます！」

そう言うなり来たときと同じように部屋から駆け出し、あっという間に姿が見えなくなる。

その落ち着きのなさに二人は呆れるも、

「いきましょうか、アキトさん」

イアスはカップに入った水を飲み干し、アキトに視線を向け、

「そうだな」

アキトもどこか疲れた息を吐いた後にイアスに続く。

二人は歩く。

格納庫と言う名の戦場に向けて。

間章 2（後書き）

「班長がきたぞお前ら！」

『おおおおおお！』

「気合いれるッ！」

『おおおおおお！！！』

「ゴウレム俺たちの——」

『嫁だ！！』

『おおおおおおおお！！！』

阿鼻叫喚とはこの事を言うのかもしれない。やる気が漲りすぎて、格納庫内の空気が色んな意味で澱んで見えるのは、きつと気のせいじゃない。

格納庫にやって来たアキトとイアスは頭痛を感じ、こらえるように手を置いたのは、当然のことだった。

この後彼らが少し暴走し要塞内でちょっとした騒ぎになるのだが……それはまた別の話である。

七月の更新には早く、少し短いかも知れないけど投稿です。同じくらしいの文量で七月末にもう一度投稿を予定しています。

最初はミゾラム要塞をこの時点では出すつもりはなかったのですが……何故かこんな流れに……。プロットでも考えていなかった展開です。

このせいで急遽外伝小説を読み進めることになりましたし……予定にない話なので、もしかしたら七月の更新時に置き換えるか、

消すかもしれません。ご了承ください。

間章 3 (前書き)

とりあえず、出かける前にもうひとつ更新です。

イエス！ ゴウレム！

間章 3

整備班の暴走により一時格納庫が使えなくなるなどのアクシデントはあったものの、それでも予定よりも早い段階で作業は順調に進んでいた。

ひと重にこれも全て整備員たちが見せた情熱のなせる技（業）であろつか。

とにかく……。

全部で五十二台。そのファブニルの六割が改修が完了し、アキト達がミゾラム要塞に訪れてからもうすぐ二週間が経とうとしていた。そして今日。

改修型の性能をお披露目するために、仕上がったばかりのファブニル（6型）と旧型のファブニル（5型）で模擬演習が行われる事になった。

ルールは単純。一チーム二小隊（八台）ずつに分れ、どちらかの全滅をもって終了となる。

公平を規すため武装は固定。プレスガン一丁とセミスパター無反応系石英を鍛えた剣ソード一本のみ。弾はペイント弾。予備弾倉も一つ。チームわけは実力が均等になるようにベテランと新兵の混合チームで振り分けられている。

場所はミゾラム要塞周囲の峡谷の一本。範囲は要塞から視界が確保できる所までとなっている。

アキト、イアスはもちろん、改修担当の技師たち、それに司令官であるサガレスに他士官数名。おおよそこの要塞においての重要人物が軒並み防壁上の見晴台に集まっていた。

皆が固唾を呑んで見守る中、遂にその時が来た。

——！！

要塞上部に固定された大型プレスガンの空撃ちが空気を震わせ、あたりに乾いた音を響かせる。これが開始の合図だった。

一定の距離を空け、岩陰に隠れていた両チームが一斉に動き出す。峡谷の谷底は緩やかな弧を描き、両者は未だ相手を視界に納めていない。

けれど大地に響く重厚な足音が、両者のおおまかな位置関係を知らせている。

三步、二歩、一歩——弧の中心点。遂に両チームの先頭が邂逅した。

出会い頭に二台のファブニルがプレスガンを打ち合う。それに続いた後続も加わりプレスガンによる撃ち合いの応酬が始まった。

乱れ飛ぶペイント弾の弾幕。赤と黄——周囲の絶壁や岩石を二色の色がカラフルに彩っていく。

けれどもこれは前哨戦に過ぎない。

弾数は同数。自然、打ち合っていれば弾が底を尽きるのも同じタイミングになる。この模擬戦の本懐はこの後の格闘戦にこそある。

弾幕が徐々に衰え、ついには止む。両者は全く同じタイミングで走り出した。

狭い谷底に折り重なるような盛大な地響きが轟いた。

アリオラは模擬戦の最中、ファブニル（6型）の搭乗席の中で僅かな驚きを感じていた。

「従来のファブニルより関節の可動域が広い、それに反応速度が全然違う」

手元の反応石英に魔力を送り、石英に赤い光が灯る。

ファブニルはアリオラの意思に応えるように靱帯を収縮させ、溜

め込んだ力を一気に開放する。

その力は炸裂と言ってもいい。弾丸のような勢いで一気に隊の先頭まで飛び出す。

既に白兵戦の距離に入っている。

ここまで来れば隊列もあまり意味を成さない。各自応戦に入っていた。

わずか十五才の天才魔動戦士（ゴウレム乗り）。それがアリオラだ。

そのふたつ名は伊達ではない。

飛び出したアリオラ機はバックホルダーからセミスパタを右手に取ると、右に向って全力で駆ける。

正面には一台。旧式のファブニルがいる。

相手も抜剣し構えるが、それでもアリオラ機のスピードは緩まることはない。

肉迫し、すれ違いざまの一撃。金属がたわむ様な甲高い音が鳴り響く。

次の瞬間、旧式のファブニルは仰向けに地面に倒れふしていた。

胴体には僅かな浅い傷がある。

本来なら胴部がべちゃんこにひしゃげて、おかしくない斬撃。

けれどこの程度で済んだのは、これが模擬戦であり、刃には衝撃吸収用の防刃材が付けられているからだ。

アリオラは相手の状態を確認せずに走り抜ける。

各所で格闘戦が起き、さながら乱戦の様相を呈している。けれど

やはり改修型のファブニルの方が格闘面では優位なのか、徐々に形勢が傾きつつあった。

それでも一方的な展開にならないのは、相手側の指揮官がこちらよりも優れているお陰だ。

一対一では不利だと直ぐに悟った相手側の指揮官は二台づつで陣を組ませ、上手く互いの隙をカバーさせ守りを固めている。対してこちら単機で思い思いに攻めている。これでは攻めきれない。

肝心のこちらの指揮官は自身の戦闘に没頭し指揮を忘れているようだった。

アリオアは瞬時に状況を判断。この戦いを最速で終わらせる道を描き出す。

なんと言っても相手の要はやはり指揮官だ。それが居なくなれば自ずと瓦解する。

けれど相手側の指揮官は一番奥。その手前には交戦中の数台のファブニルが壁のように立ちはだかり、とてもじゃないが普通には通れない。

アリオアは考え……すぐに結論だす。

そしてファブニルに魔力を介して意思を伝える。イメージは自分の意思をファブニルに埋没させる感じに近い。

ファブニルはアリオアの意思<命令>を受け取り、思いのままに動く。

軽く膝を曲げ、限界まで靱帯を収縮。そのまま力を溜め込み――一気に解放。爆発させる。

足が地面を削り、臂力で大地に浅い罅が入る。

弾かれたように走り出したファブニルは瞬く間に最高速度に到達。とてもファブニルとは思えない速度で、相手の指揮官がいる斜め横を目指して走る。

後ろでアリオア機を見ていた仲間も疑問に思う。その先には壁しかない。

そんな全力で走ったら壁にぶつかり大惨事になるのは目に見えている。

気でも狂ったか……？ 誰もが思った。

けれどアリオアには確信があった。

いける！ 従来のファブニルでは無理でもこの新型のファブニルならいけると。

そのまま勢いを落とさず走りぬけ、目前にまで絶壁と言ってもいい垂直の壁が迫る。

搭乗席にある半球状のドームに投射された映像には、壁で埋め尽くされる。

それに従い、アリオラの心拍数も上昇する。だが恐怖ではない。この上昇は高揚だ。

アリオラ機は壁まで後三步という所で壁に向って斜め前に跳躍。その光景を目撃した誰もが壁に激突すると思った。

けれどそうはならなかった。

アリオラの意味に応えるように搭乗席の反応石英が一際明るく輝く。

ファブニルは壁に激突する直前、右手に持つ剣で重心をずらし体勢を斜めに持ついくと、着地。

垂直のはずの壁に両脚をつくつと、そのまま勢いよく跳んだ。

負荷に靱帯が唸りを上げるが、問題ない。

一瞬の滞空。アリオラ機の最高高度は十メートルを優に超えた。目撃したものはその光景に動きを止め、見とれる。

アリオラのファブニルは直ぐ横で戦闘を繰り広げるゴウレムの頭上を越えて、着地。

膝を曲げて着地の衝撃を和らげると、右足を重心に回転。

右手に持つセミスパタを振り向きざまに背後の相手に振り抜いた。右腕に鈍い衝撃。遅れて大質量の物体が大地に落ちる重い音が響く。

アリオラは振り返ることなくそのまま相手指揮官機に向って駆ける。

相手チームもすぐにそれに気付きフォローに入ろうとするが、それは友軍が許さない。

アリオラはその事を確認し、指揮官との間合いを一気に詰め、肉迫。

互いの剣がぶつかる。

ガン！ と甲高くも鈍い音が周囲に響く。

けれどアリオラも防がれることは分っていた。

冷静に判断を下し、下腿部に魔力を集中。反動で後ろに流れる体を無理矢理持ち直す。

指揮官機の剣を持った腕は未だ後ろに流れている。代わりに盾を突き出しアリオラの斬撃に備える。

だがアリオラはここで斬撃ではなく、肩から勢いを乗せて盾に当たっていった。

大質量同士のぶつかり合い。弾かれたのは指揮官の持った盾だった。

全重量を乗せたタツクルと、片腕で支える盾。打ち勝つのは当然前者だ。

開いた胸部にアリオラ機の剣が無慈悲に振りぬかれる。

それで終わりだ。

指揮官は倒れ。残った者にこの流れを変える術はない。

あとは一方的な蹂躪戦が待っていた。

戦闘の様子を要塞から見ていたアキトは思わず感嘆の声を漏らす。その理由明確だ。

一台だけ動きの違うゴウレムがいたからだ。あれだけ別格と言ってもいい動きをしていた。

隣にいたイアスも同じような反応をしていた。

「あれは別格ですね。まさに天才というやつでしょうか」

「そうだな。瞬時判断能力、機転、格闘センス。どれをとっても優秀だ。それに乗ったばかりの新しいファブニルの性能を充分に引き出している」

「恐ろしい才能ですね。あとは似たりよったりですけど、結果は概ね良好だったんじゃないですかね。向こうの反応もいいようですし」

そう言ってイアスは視線を少し離れた場所にいるサガレスたちに向ける。

サガレスはいつもと変わらない飄々とした雰囲気でわかりづらいが、周りの士官たちは、しきりに頷き、口元には薄っすらと笑みが浮かんでいる者もいる。

傍から見ても結果は良さそうだった。

「そうだな。あとは残りの改修を終えれば俺たちの仕事も終わりだ。もっともこの技師たちに任せておけば直ぐにでも終わりそうだが」

アキトはちらつと横目で技師たちを見る。

彼らは皆一様に興奮した面持ちで、何故か涙すら流しているものがある。

アキトは見なかった事にして、イアスに視線を向けた。

彼も困ったような表情で笑みを浮かべていた。

これから待つ、ファブニルの修理もきつと彼らがいれば直ぐに終わることだろう。

アキト達は苦笑を浮かべあうと、感想と意見を聞くためにサガレスたちの下へとゆっくり歩きだした。

間章 3（後書き）

たまの戦闘パートどうでしたでしょうか？

あまり戦闘シーンを書いたことないので、きっと上手く伝わらないかもしれませんが、そこらへんはこれから練習していきますのでご勘弁を。

さて今回の話はほとんど外伝小説の主人公のアリオラが主役の話になっけしませんでした。

まあ、せつかくミゾラム要塞来たんだし少しフラグたてとこかな、ぐらいの勢いで書いたお話です。

後に新型機にアリオラを乗せる。

アリオラ無双とか……？　ちよつと頭で妄想してみたり。
ではこれで。

間章 4（前書き）

そろそろ間章も終わりかな。

間章 4

模擬演習後の格納庫。

そこは一種の戦場と化していた。

運びこまれたゴウレムの修繕箇所のチェック。必要資材の見積もり。問題点の検証。など……。やる事は山のようにある。

すこし前に開かれた簡易のミーティングでは効率を優先した結果、ここの設備に慣れ親しんでいる技師たちに一任する事になった。

一方手隙になったアキトとイアスの二人はとある一台のゴウレムの前に来ていた。

ファブニル（6型）そう呼ばれる機体は現在、全身の装甲が取り外され、中の靱帯とフレームがむき出しのまま、立膝の姿勢で固定されている。

イアスはそれを見上げ、特に下腿部を注視しながら呆れを含んだ何とも言えない声を漏らす。

「まさか一度動かしただけで限界稼働の検証をするはめになるとは思いませんでした」

「そうだな。だがあんな無茶な機動は想定されていないからな。先に関節がタれるのも無理ないだろう。確かアリオラ……そう言ったか、これの搭乗士は？」

アキトに問にイアスは手に持つ資料を確認し、はい、と頷くと、補足するように付け足す。

「アリオラ。今年軍役に就いたばかりのようです。若干十五歳という年齢ながら訓練学校で優れた才能を発揮し、特例で入隊が認められたところには記載されてますね。ですがあの動きを見れば頷ける話です。天才少年というやつですね」

「天才か……このファブニルではその天才には物足りなかったみたいだな」

「そうなりますね。足部、膝関節部のダメージ無視できないレベルですし、それ以外にも下半身のフレームに若干の歪みが見られます。靱帯に至っては一部取り替えないとダメですね。いつ断裂してもおかしくないですよ」

「重量級のゴウレムで飛んからな……それくらいの代償はつくか。他はどうなっている？」

イアスは資料を捲ると、そうですね……、と前置きし、少しの間を空けてから答える。

「上半身は特に問題点らしきものは見当たりません。靱帯の消耗は他のゴウレム（もの）と変わりませんし、寧ろあれだけ派手に動いたのにたいして変わらないのが不思議なくらいですよ」

イアスの言葉にアキトは、ほう……、と感心した呟きを漏らし、腕を組む。

「ならそれも搭乗士の腕だろうな。とりあえず上は通常通りの整備で。下はフレームごと取替え……いや、関節部を補強したほうがいいか」

「補強ですか……？」

「ああ。毎回コレでは話にならないからな。とりあえずこいつの修理は一番後回しにして、全ての整備が終わってから皆からも意見を聞いてみよう」

「……わかりました。なら必要な資料と会議の準備はこちらでします」

「ああ、頼む。悪いないつも面倒ごとを押し付けて」

「いえ、好きでやっていますから。では」

イアスは軽く微笑むとその場を後にした。

アキトは組んでいた腕を解くと、もう一度ファブニルを見上げる。剥き出しのまま立膝で聳えるソレは、まるで人体の標本か何かのようだ。

フレームは骨。靱帯は筋肉。構造を考えるとここまで人に造りに似た兵器はない。

「ロボットとはまるで別物だな」

アキトはつくづく思う。

ロボットが人の”形だけ”を模した物に対して、このゴウレムという兵器は人そのものに近い。

フレームの関節構造、靱帯の張り方に至るまで、人体の構造に似すぎている。

「だが、だからこそ可能性はあるか」

人型という固定観念の脱却。

それが出来れば、きっとゴウレムという兵器技術は更に一段階上の兵器に進む事になるかもしれない。

しかし——同時に考えてしまう。

（それはこの世界には不必要なものではないのか）

——大きな力は争いを生む火種にしかない——

アキトはその事を知っている。

知識で、経験で、二度の戦争で……その事を骨身に染みて理解している。

なら今は――。

「あの……」

考え事をしていると背中から小さな声をかけられ、アキトは振り向く。

子供……？

そこには金髪碧眼のまだ幼い顔立ちの少年が、気まずそうな表情で立っていた。

知らない顔だ。この子とは初対面の筈……そこまで考えてアキトはこの子が誰かに思い至る。

「もしかして君がアリオラか？」

言葉を詰まらせて視線をさ迷わせていた少年は突如、名前を呼ばれ事でパツとアキトの顔を見上げ、

「は、はい！　そうです。何で僕の名前を……」

「少し君の話を耳にしてな。それより、俺に何か用か？」

問いにアリオラはファブニルに一度視線を向け戻すと、

「その、だいぶ機体に無理させてしまったので大丈夫かと思って……。あと謝りに」

その事かと、アキトは頷き、未だ気まずそうな表情をするアリオラに視線を向け、

「気にするな。治すのが俺たちの仕事だ――と言いたい所だが少し無理させすぎだな。重量級のファブニルで飛ぶのは流石に無茶しす

ぎだ」

「すいません。——そんなに悪いんですか？」

「とりあえず下半身はフレームと鞆帯は一部取替えだな」

「そうですか……ほんとうにすいません。ご迷惑をかけて」

アリオラはますます肩身が狭そうにしてぺこりと頭を下げる。アキトはアリオラ肩に手を置き、頭は下げなくていい、と言。彼が顔を上げるのを見届けると言葉を続ける。

「気にするなとは言わない。だが次からはもう少し考えて乗ってくれ」

「……はい」

「それとこいつの足周りについてだが少し補強しようと思っている。出来れば君の意見を聞かせてくれないか」

「僕のですか……？」

アリオラはかけられた言葉に疑問を浮かべながらアキトを注視する。アキトはそれに頷き、

「そうだ。やはり乗り手の意見は重要だからな。後で参考にしようと思う」

「……わかりました。ありがとうございます。こちらこそおねがいします——」

こうして少しの間、アリオラとアキトは意見を交わし合った。

それから数日後……。

ファブニルの改修を終え、出立を明日に控えた最後の夜。

アキトは自室で軽く荷物の整理をしていた——と言っても、持ってきた私物は着替えなどの最低限のものだけなので、それも直ぐに終わる。けれど寝るにはまだ早い時間だ。

さて、どうするか、とアキトは持て余した時間を悩むように顎先に指を当てたときだった、

——コンコン。

扉が規則正しくノックされる。

開いている。アキトが短く応えようと扉が開かれた。

「夜分にすいません、アキトさん。今大丈夫ですか？」

そう言って入って来たのはイアスだ。

彼は少し恐縮したような表情で扉の前に立ち、頬を二回搔いた。

「どうしたんだ？ 何か用か」

「ええ、俺が……じゃないんですが、どうも技師の方が俺とアキトさんの両方に用があるみたいで、格納庫まで来て欲しいって、さっき伝言を預かったんですよ」

「格納庫？ 何か問題が起きたのか」

「どうでしょう。特に慌てた様子はなかったですし、内容もただ来てくれと言われただけですから」

「なら行って確かめるのかなさそうだな」

「ですね」

言ってイアスは苦笑。部屋の外に出た。アキトもその後が続く。

■

しばらく歩き、イアスは格納庫へと続く扉を開けると、

「あれ？」

言葉と同時に首を傾げた。

その理由はイアスの後ろを歩いていたアキトにも直ぐに理解できた。

正面。扉の向こうは暗闇に覆われていた。だけど複数の人の気配だけは感じることが出来る。

イアスが一步。中に足を踏み入れた瞬間——パツと、一斉に明かりが灯った。

急激な明度の変化に、手をかざし目を細める二人の先。格納庫の中央に、ここ一ヶ月で既に見慣れた顔となった技師たちが勢ぞろいしていた。

アキトとイアスの二人は何事かと注目していると——集団の中から一步。髭面の中年の男が前に出て、

「お疲れさまでしたっ！」

一拍遅れて全員がその言葉を復唱した。

アキトとイアスは目を見合わせ、次に二人で苦笑。

「そういうことですか」

「みたいだな」

手に酒瓶を持つ男たちを見て、思わず笑みが浮ぶ。

こうして最後の夜。ささやかながら送別会を開いてもらい。翌日、アキトとイアスの二人は気持ちよくミゾラム要塞を旅立った。

一方王都ビノンテン。こちらでは一部の間で俄に緊張感が高まりつつあった。

「あまり良いとは言えない流れだな」
「ですな」

城内のホズルの執務室。

ホズルの苦い呟きに応えたのは大臣のロレンだった。

「まさかオーランドがここまでの強気にでてくるとはな」
「これも血気盛んな好戦派が勢いづいているが所以^{ゆえん}でしょう」

ホズルは頭を痛めるように一度手を額にやり、視線を机の上の手紙に落とした。

「抗議に対する返答はなし。一方的に演習日の指定。随分と舐められたもんだな。それで裏は取れたか？」

「いえ、まだ。ですがここ最近、オーランドの手の者がアッサムへ頻繁に出入りしているのは確かなようですが」

「アッサム、か……」

ホズルは呟くと微かに目を細め、物思いに耽るように吐息。机に両肘をつき顔の前で手を組むとロレンを見た。

「ロレン。おまえはどう予想する？」
「まだなんとも……ですがアッサムにオーランドの好戦派が絡んできたとなると、見えてくるのはあまりいいものではありませんな。」

もしもこちらが考えた最悪のシナリオ通りにいけば……」

そこで言葉を切り、その先を口に出すのを憚るようにロレンは口を噤む。

——が、

「——戦争か」

ホズルが言葉を引継ぎ嘆息する。

それにロレンも静かに頷くと顔を曇らせた。

「もしもそうになったらクリシュナも無関係ではいられないだろうな」

「はい。ですが現在のアッサム国王はアテネス連邦より。とてもではありませんがアテネスに対して宣戦を布告するような状況になるとは思えません」

「だがもしもオーランドがアッサムを足がかりにして戦争を画策しているとしたら……今回の演習といい色々と筋は通るな」

「まさか演習を利用して軍を派兵すると？」

「あまりに暴論か？」

重ねられた問いに、ロレンは表情も陰しく眉間に皺を寄せ、

「……そう言わざるおえませんか。それではクリシュナとの国交を、いえ、国としての信用と体裁にも関わります。その様な恥知らずな行為を——」

「だが俺はロレンが思っているほど、オーランドという国を信用してはいない」

陛下！ ロレンは迂闊な発言を嗜めるように少しだけ声を荒げる。
それをホズルは片手を突き出す事で黙らせ、

「そんなに怒るな。場所はわきまえている。今はお前と俺の二人しかないのだから問題はないだろ」

「ですが……」

「——くどいぞ」

まだ何か言いたそうにしていたロレンだが、その言葉で押し黙る。少しの静寂。場を仕切り直すようにホズルは小さく息をつき、

「とにかく事は最悪の事態を想定して動くべきだ。対応が遅れては国の存亡に関わりかねない」

「はい」

「アッサムへは続けて探りを……開戦の突端になりそうなものを徹底的にだ。それと後で参謀長をここに」

「わかりました。そのように」

ロレンは恭しく頭を下げた。

■

ゼロ番格納庫。通称実験格納庫とも呼ばれる場所。

その中央。シギユンと技師の格好をした初老の男性が立っていた。両者の視線は正面。格納庫の出入り口から直線状に向けられている。

「さすがはシギユン様、と言ったところですかな？」

老人は顔の位置は正面に固定したまま、視線だけで投げかけてくる。

対するシギユンの答えは、いえ、と短く一言。老人は目を楽しげに目元の皺を深めると言葉を続ける。

「ほほ、相変わらずですの」

その”相変わらず”という言葉はどの意味にかかっているのか？
先程の質問か、それとも自分の素っ気ない態度にか、少し考え…
…両方だと結論。

シギユンは気付かれない程度に短く嘆息。ジト目で老人を見て、

「あなたも変わりませんね」

「それはそうですね。伊達に長くは生きておりません。そうそうにこの性格は直りはありませんて」

一国の王妃を相手とり、からかう様な口調に、好々爺然とした態度。敬意は感じられるが、畏まっではない。シギユンは老人との初めての出会いを思い出し……最初からこんなだった、と何となく思い出し、溜息を吐いた。

老人は笑みを深くし、再び正面に視線を戻し続ける。

「それにしても今度のゴウレムは完成したら凄い事になるでしょうな。性能面は現状ファブニルと大して差異はありませんが、ある意味では今までの常識を覆すかもしれませんからな。老いばれには未完成のコレが可能性の塊に見えますわい」

そう言って豊かな顎鬚を撫で、老人は楽しげに笑みを深める。

シギユンも連れるように老人がコレと称したものに目を向けた。
前と左右。三つあるハンガーのうち正面。そこには組みあがった

ばかりなのか、傷一つない新品のフレームがワイヤーにより吊り下げられていた。

全体的に無骨ながらも、鋭角的なフォルムには一切の無駄を省いたような洗練さが窺え、一種の芸術品の様にすら見える。

シギユンは下から上まで見上げ、でも、と言葉を前置くと、

「これはまだまだ未完成です。このフレームも技術検証するために仮組みしたに過ぎません」

「だからこそ多くの可能性を残している、と言えるでしょうな。わしは今からコレが完成する日が待ち遠しくてまたりませんわい」

齢六十を越える老人の、まるで新しいおもちゃを待つ子供の様な姿に、シギユンは思わず苦笑。同意を示すように一度頷いた。

老人は嬉しさを表すように両手を掲げ、

「——早う、見たいものですな。この”リムーバルフレーム”の完成形を」

その言葉は風に乗リ、格納庫の外にまで届いた。

■

代わり映えのしない、何の面白味のない風景。

褐色の大地に、荒れた岩肌。

どれもここ最近で見慣れた——いや見飽きた風景だ。

四輪車の助手席。アキトは強い陽射しに目を細めて、前から後ろに流れる景色に漠然と目を向けていたときだった。

？ 一瞬、視界の端に何かが過ぎり、

「止めてくれ」

何なのか——それに気付いたアキトはイアスに短く告げた。
イアスは四輪車に制動をかけ、

「どうしたんですか、アキトさん」

緩やかに減速していく四輪車の運転席の上。イアスはアキトの方に振り仰いだ。

「人が倒れている」

ベクトルがゼロになった車体の上。アキトは簡潔に答えると同時に座席から飛び降りた。

アキトが身体を向けた方角は八時の方向。イアスもそちらに視線を向け、

「——！」

三十メートル後方。そこに岩とは明らかに違う、地面にうつ伏せに倒れる人影が見えた。

「少し様子を見てくる。イアスは待っていてくれ」

アキトはイアスに声をかけると、乾燥した大地を踏みしめ一歩。ゆっくりと駆け出す。

時間にして八秒。人影まで後五メートルと近付いたアキトは不意に足を止めた。

「——子供」

微かに驚きを含む声。

目前に倒れ付す人影の身体は小さく、伸びる黒髪は長い。体格から見て十歳前後。それもどうやら少女らしい。

何故こんな所にこんな小さな子が一人で？ 頭の片隅で考えながらも身体は前へ。アキトは残りの距離を一気に詰めると、肩膝をつき、少女の肩に手をかけた。

「大丈夫か返事をしろ」

返って来た答えは無言。だがこの状態で返事が返って来ることはアキトも期待していない。

少女の体勢を仰向けに変え、口元に耳を持つていく。微かに息は聞こえる。だがあまり強いものではない。

「それに異常な熱さに発汗。脱水症状は間違いない、か。少し拙いな」

アキトは耳を離すと、チツと舌打ち一つ。手を口に持つていき黙考。かかった思考は一秒未満。

決断を下すと、アキトは片手で腰に差した水筒を手に取り、空いた手で少女の頬を軽く叩く――が、やはり反応は無い。

気付くのを待つか……そんな考えが過ぎるが今はそんな悠長な事を言っている場合ではないかと嘆息。

アキトは水筒の水を口の中に少量含み、少女を胸に抱き起こす。

そして口移しで水を飲ませた。

ごくぐん、と少女の喉が一度大きく嚥下。次にコホッコホッ、と軽くむせる。

顔を離し少女の背中を軽く擦りながら様子を窺っていると、

「あれ？」

そんな間延びした声と共に、少女の瞼がゆっくりと開かれ、黒曜石の様な黒い輝きを放つ双眸が露になる。

意識がまだはつきりとしていないのか焦点が定まっていらない。

そんな少女にアキトは言い聞かせるようにゆっくりと言葉をかけた。

「大丈夫か？ 喋るのが辛いなら頷くだけでもいい」

意識が朦朧としていても言っている事は理解できたのか、少女はハッキリと小さく頷いた。

アキト軽く安堵の吐息。そのまま水筒を差し出し、

「水は飲めるか？」

その質問にも少女はゆっくりと頷く。

アキトは水筒の口を少女の口に持つて行き、ゆっくりと傾ける。

少女の喉がコクコクと小さく音を立てて何度か嚥下を繰り返した後……次第に少女の瞳の焦点が収束。意識が定まりつつあるのがアキトから見ても分った。

これなら大丈夫そうか——アキトがそう思ったときだった。

少女の目がハッと見開き、今まで口をつけていた水筒を押しつける。

そして、

「——たすけて」

切羽詰った表情。少女はか細い声でそう言った。

間章 4（後書き）

今回は視点の乱立が目立つなと自分でも思うけど、これ以上に書きようがなかった。もう少し構成力が欲しいなとつくづく思います。

それと八月の更新はお休みさせていただく事になると思います。

どうしてもこの時期は忙しいので、どう調整しても執筆時間があまり取れなさそうなので……申し訳ないです。

短くてもいい。という意見があるのなら一度切りのいい所で八月中に上げてもいいかとも考えてますが……果たしてそこまで本当に終わるかもわからない状況。

状況を見ながら活報にて一度報告したいと思います。

間章 5

「――助けて」

少女は震える手でアキトの服の裾を弱く握りしめ、

「村が……ママが――おねがいっ」

叫ぶように少女は声を絞り出す。

顔に浮かぶのは困惑、恐怖、切望。

そのどれでもあり、どれでもない、そんな表情を浮かべ少女は懇願するようにアキトを見つめる。

―― いったい何が、この幼い少女にこんな顔をさせるのか――
その理由を考え…… 見えない憤りを感じるも、吐息一つで自制。
いまだ裾を掴む震える少女の手を自分の手の平で優しく包み込んだ。

「大丈夫……落ち着いて」

少女と視線を合わせ、落ち着いた声で優しく言い聞かせる。

大丈夫。その言葉を繰り返し、少しでもだけ包む手の平に力を込めると、少しして……少女はコクンと頷いた。

それを確認したアキトは少女から手を離し、

「たてるか？」

短い問いかけ。

少女の答えは無言。けれど首はしっかりと縦に振られていた。
アキトは胸に抱きかかえていた状態から少女を立たせる。まらふ

らつく身体を片手で背中から支え、

「あそこに仲間がいる。詳しくは合流してからでいいか」
「……はい」

アキトはが四輪車が止まる方向を指差し——少女は躊躇するも、
短く返事をした。

■

イアスはこちらに向ってくる二人を目視、確認すると四輪車の運
転席を下り、

「アキトさん」

声をかけ、自分から残りの距離を詰めた。

「その子が……？」

確認の意味も込めて問いかけ、黒髪の少女を見ると——ビクッと
肩を跳ね上げ、アキトの後ろに隠れてしまう。

これはまた……

イアスはポリポリと困ったように頬をかいた。
その様子にアキトは軽く苦笑。そのまま言葉を繋げる。

「少し早いが昼食にしよう。話はそれからだ」

そう言って少女を見る。イアスも釣られるように視線を向け、
……なるほど。

確かに少女の顔色は悪く、血色もあまり良くない。それに自力で立ってはいるが、今にも倒れてしまいそうなほど心細いものを感じる。

どう見ても極端に体力が低下している証拠だ。なら今無理に話を聞くのは良くないかと、アキトの提案に納得。

イアスは口元に笑みを浮かべると、わかりました、と快く返事をした。

■

食後の一時。

「それで何があっただ」

揺れる黒瞳。少女に問いかける。

車上、助手席。そこに座る少女は大地に立つ、アキト、イアスへと視線を向け、最後に二人を視界に入れる位置で固定。

戸惑いの色を色濃く残す瞳で、やや躊躇いがちに口が開かれた。

「……昨日の朝方。とつぜん村に知らない男の人達が押しかけてきて……最初はなんだか大人たちと揉めている感じだで……でもその直後に大きな怒鳴り声が聞こえて、悲鳴も聞こえて……ママが見たことのない怖い顔で駆け寄ってきてわたしに逃げろって……逃げた助けを呼んで来てくれて頼まれて……それで、それでわたし……」

そこまで一気に話し、最後は消え入りそうな声。

その時の事を思い出したのか、少女は顔を伏せ、小さく身体を震わせる。

……なるほどな。

とアキトは口中で呟く。

おおよそだが事情は理解できた。そして自分が今、何をすべきか。

ここで励ましたり、労ったりするのは後でも出来る。
だから今は……

「イアス」

「——はい」

呼びかけると直ぐに返事が返って来た。顔に浮かぶのはどこか諦めたかのような苦い表情。

どうやらこちらが何を言いたいか分っているらしい。

「俺は手を貸したいと思う」

「それは俺が否定しても——」

アキトの表情を窺うように視線を向け、

「……無駄なんですよね」

心の声を吐露するように深い溜息。しかしすぐに表情を引き締め、

「わかりました。どうせ否定しても無駄なら協力します。けど危険な事は避けてください、この意味わかりますよね？」

嗜める様な含みを持つ声。

その意味を正確に理解し——アキトは苦笑と共に頷く。

「ああ、努力はする」

その返事にイアスが盛大な溜息を吐くのを横目にアキトは少女へ

と目を移し、

「こういう結果になった」

二人の様子を窺うようにして見ていた少女は、えっと、と呟き、

「……助けてくれるんですか？」

「確実とは言えない。でも出来る事だけはしようと思う」

その言葉に少女は破顔。泣き笑いの様な複雑な表情を浮かべ、

「——ありがとうございます」

噛み締める様に、その言葉を口にした。

■

日が西に傾くこと数時間。

今まで休みなく走り続けた四輪車は、その足を漸く止めた。

場所はオアシスの森の手前。目の前に鬱蒼とした森の入り口が開いている。

「ここでもいいのか？」

視線は前方。森に固定したままアキトは少女に問いかける。

「はい……この先のオアシスを抜けた先にわたしの村があります」

「こんな所に村があるなんて……地図には載っていませんし、どうやら未登録の村のようですね」

地図を確認しながらイアスが補足を付け加え、アキトを見た。

「それで、これからどうしますか？」

「とりあえず俺が先に様子を見てくる。イアスはいいつの番。これでどうだ？」

そう言つてアキトは固めた握り拳で四輪車の車体を軽く叩く。

「構いませんがこの子は？」

イアスは隣に居る少女に視線を向け、

「道案内と言いたい所だが何があるか分からないからな。イアスが見てくれ」

「……わかりました。異論はありません。けれどアキトさん。くれぐれも無茶なさらないように」

「わかつている。様子を見るだけ、だろ」

「はい。わかつているのなら」

「すまない。後は任せる」

そう言つて森へと足を向けたアキトの背中に、……あの、と少女の遠慮がちな声がかかる。

アキトは首だけで振り返ると、

「——気をつけてください」

瞳に心配の色を乗せて、少女はそれだけを告げると顔を俯かせる。

アキトは軽く笑みを浮かべ、歩みを再開。

森の中へと足を踏み入れた。

■
薄暗い森の中。アキトは下草を強く踏みしめ疾走する。

枝葉の隙間から見える天上、そこは既に紫と黒のグラデーションに彩られている。

もうすぐ夜が近い。

その事を実感すると共に速度を上げた。

林立する木々を最小限の動きで縫うように駆け抜け、邪魔な草葉は最低限手で掻き分ける。

その作業を何度繰り返し返したかもわからない。体感時間ではもうすぐ一時間が経とうとしている。

あとどれくらいか……そんな考えが浮かび始めたときだった。

——パチン。

アキトの耳は前方、微かな音を捉えた。

木炭が弾けるような乾いた音。少し遅れて煤の匂いが鼻をつく。間違いない。何かが燃えている。

けれど森火事とは思わない。少女から聞いた村の状況、経過した時間を踏まえ考えれば……頭の片隅に最悪の展開が過ぎる。が、それを振り払いアキトは先へと歩を進める。

だが、

「——！」

突如アキトは歩みを止めた。

正面、風上から煤の匂いとは明らかに別のニオイが混じっている。何の匂いか……考えるまでもなく直ぐに判った。

血。

鉄錆びを思わせる独特の二オイにアキトは能面のように表情を冷たくし先を見据える。

心に浮かぶのは——やはり、といった達観した諦めにも似た感情。アキトは止めていた歩みを再開。

気持急ぎつつも、先程よりも慎重に前進する。

まだ直接視認したわけではない。万が一の可能性も……

それがありえないと事だと自らが一番認識しているのに関わらず、それでもその言葉を思い浮かべてしまう。

既に森の出口は見えている。

もう目と鼻の先だ。

アキトは森の切れ目、前方の光に飛び込んだ。

■

森を抜けた先——そこには最悪の結果であり、ある意味で予想通りの結果が広がっていた。

僅か二十ほどしかない家屋のいくつかからは煙が立ち昇り、至るところに人が倒れ付していた。

特に酷いのが村の中央。広場とおもしき場所に大量の人間が折り重なるようにして事切れている。

広場の地面は何人も人の血を吸い赤黒く変色し、それでも吸いきれない分は地面の傾斜に沿って分岐、細く糸のように流れを作っている。

一種異様な光景。とても生存者がいるとは思えない。

どうする——アキトは村と森との境界線上で思考を重ねる。

本来ならここで引き上げてイアスに報告するべきだろう。

けれどももしかしたら生存者がいるかもしれない。その事を考えるとしてもこのまま何もしないで村に背中を向けることは出来なかった。

……すまないイアス。

無茶しないように言い含めたイアスに心の中で謝罪し、アキトは村へと一歩。境界線を越えた。

村は静かだった。

生命の躍動というものが止まった村。そこに人の姿はなく、かつて人だったものの末路が転がるのみ。運ぶ風は澄んだ爽やかなものなんかではない。血と汚臭に塗れた不快な臭い。

村が人が集い生活する場所と言うのなら——いまのこの場所は多くの死者が眠る墓だ。

アキトは墓の中央、家屋が囲む広場に佇んでいた。

「——すまない」

自然と零れた自責の言葉を聞くものはいない。

倒れ付した人々の前、アキトは軽く目を瞑り、短い黙祷を捧げる。結局生存者は見つからなかった。

外、屋内、村の全てを探した。けれど……

強く拳が握られる。それでも力が緩むことはなく——行き過ぎた力はやがて拳を震わせる。

胸には暗く重いものが押し掛かり、固めた拳はそのまま胸に。アキトは深く息を吐いた。

「……どう話すかな」

瞼を開けると頭を過ぎるのは少女の事。

ありのままを伝えるか、それとも……

伝えるのは簡単。けれど後の事を考えれば正直に話すのは憚られる。

だが結局はそれも時間の先延ばしに過ぎない事はアキトも分っている。

いずれ少女はこのことを知る。これはもう確定事項だ。

早いか遅いか——それなら……

アキトは決意を固め、空を見上げた。

瞳に映るのは濃い濃紺のグラデーション。

遙か遠方では丸い月が柔らかな光を放っている。

「……すこし時間を取られ過ぎたな」

これは戻ったらイアスから小言の一つでも貰いそうだと吐息。

アキトは来た道を引き返そうとした時だった。

後方、僅かな気配を感じ取り——アキトは反射的に後ろに振り向いた。

距離は十メートル。夜影に隠れるようにして佇む小さな陰がある。暗く、顔は確認できない。けどアキトはその影に見覚えがある気がした。

……まさか。

目を凝らすように影を見る。だが夜影に隠れた姿はそうそう見えるものではない。

どうする……近付いて確認するか、と考えた時だ。

突如風が吹き、雲が流れる。

まるで闇を押し流すように、大地が淡い月の光に照らされ、カーテンが引かれるように影にむかって流れていく。

光の下、少女の姿が露になり、アキトと少女、二人の視線が交差した。

■

無垢な天の光は、善悪関係なく全てを照らしてしまう。

両者の姿も、その向こうに広がる凄惨な光景も。

……マズイ！

アキトがそう感じたのと、少女が言葉を発したのは同時だった。

「……ママ」

呆然とした小さな呟き。

少女の目は見開かれ、視線はアキトを越えて向こう。後方に広がる広場に向けられている。

ママ、ともう一度繰り返し、少女は弾かれたように飛び出した。走り出した少女の瞳にこちらはもう映っていない。ただその向こうにのみ焦点が絞られている。

横を通り過ぎる直前、アキトは少女に向って右手を伸ばすが……その手が後一步という所で止まる。

少女が横を駆け抜ける。

何故伸ばした手を止めたのか……、未だ宙をさ迷う自身の手を見つめ数秒。

思い当たったアキトは、ああ、そうか、と力なく手を下げた。

「今あの子に必要なのは慰めの言葉でも、ましてや現実から目を背けさせる事でもない……か」

アキトは苦い経験を思い出すように眉を寄せ、瞳は悲しげに。

そのまま深く息を吐き、でも、と続ける。

「この重い現実を受け止めるにはあの子は幼すぎる。だからせめて

……」

アキトは振り返る。少女の背中を追って。

振り返った視界、正面。広場の片隅で、膝をつき倒れ付した女性に必死に呼びかける少女の姿があった。

その叫びにも似た声はアキトの所まで確かに届いた、ママ、と。アキトは歩き出す、少女に向って。

そして背後に立ったとき、少女は言った。

「ママが返事をしてくれない。いつもわたしの名前を——イシュッて優しく呼んでくれるのに」

「……………」

「ママ死んじゃったの……………」

その言葉が深くアキトの胸に突き刺さる。少し迷い、アキトは、

「ああ」

と正直に答えた。それに対して少女は無言。

しばらくしてから、……………そっか、と短く返した。

「そっだよね……………そうなんだよね。わたし間に合わなかった、間に合わなかったよ。ゴメン……………ママ……………ゴメンなさい。ごめんなさい、ごめんなさい——」

詰まらせ、言葉は途中ですすり泣く声へ。そして大粒の涙と共に叫びにも似たイシュの慟哭が夜空に響き渡った。

アキトはその背中を支えるよう、背後からそっと優しく抱きとめた。

■

意識が目覚める。それは闇から光に浮き上がる感覚に似ている。イシュは今、その上昇感を得ていた。ぼやけた感覚が急速に一つに絞られていく感覚。

身体の重さが感じられるようになり、

「……んん」

という自分の声に気付き、目を開けた。暗い。

ぼやけた視界に映る色彩は限りなく黒に近い一色。身体は寝ている。背中には硬いシーツの感触がある。

次第に視界が整っていき、焦点が結んだ像。それはどこかの家の天上だった。

「……は——」

言葉は男性の声に止められた。

「森に一番近い家屋の一つだ。申し訳ないが勝手に使わせてもらった」

声に、イシュは暗がりの向こう——壁を背に佇む男に視線を向けた。

見覚えのある顔だった。アキト、そう呼ばれている人だ。

何故自分はこんな所で寝ているのか、そんな疑問を視線に込めてアキトを見る。すると彼はこの暗さでも正確にこちらが見えているのか絶妙なタイミングで、

「泣き疲れて途中で意識を失ったんだ」

と、こちらが求めた答えを返してくる。

……あ、そうなんだ。恥ずかしい所を見られたな、とイシュは照れ隠しに顔を俯け——でも何で泣いていたんだろ、とそこまで考えが回ったとき、不意に身体が震えだした。

「……あれ？」

自身でも驚く戸惑った声。視線の先、翳した手の平は震えていた。

「……なんで」

呟きと同時に手の平に何かが打った。温かいような冷たいような、湿り気を帯びた何か。

それが何なのか……気づいたイシュは困惑を深めた顔で、

「あれ？　なんでわたし泣いてるんだろ……なんで……」

そう言つて、指先を目元に持つていくと予想通り濡れていた。ゴシゴシ袖で拭う。けれど止まらない。どんどん溢れてくる。

「止まらない……止まらないよ……なんで」

……こんなに涙が出るのか？

その理由を考え三秒。はつきりしだした意識に漸く記憶が追いつき、さらに涙が溢れた。

「……そうだ、わたし……わたし……」

悲しみ、絶望、後悔、そのどれでもあり、どれでもない表情を浮かべ、震える体を押さえつけるようにイシュは自分の体を強く抱き

しめる。

両腕に痛いほど自分の指が食い込むが痛いとは感じない。それ以上
に心が痛かった。

「——ママ」

と呟くと、横から、

「無理に思い出さなくていい」

声と共に頭に温かい何かが乗せられた。

イシュは俯けていた顔をゆっくりと横へ。遅れてそれがアキトの
手だと気づく。

手が水平に往復し、頭が優しく撫でられる。

え？ と最初は何をされているのか理解が追いつかなかった——
けれど自分がどういう状況か、それがわかったとき、ごく自然にイ
シュはアキトの胸に抱きついていった。

力を込めると、また頭を優しく撫でられる。

温かいな、そう感じながら、イシュはアキトの胸で声をかみ殺し
ながら、その涙が止まるまで泣き続けた。

間章 5（後書き）

一応これを八月分の更新とさせていただこうと思います。
もしも纏まった休みが取れたら、八月にもう一度更新をいれるかも
しません。
では、これで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5736q/>

ブレイクブレイド 黒の章（改）

2011年10月7日03時10分発行